

# ポチの耳・私の髪

たくき よしみつ  
鐸木能光

(承前)

## ■ 第二部 ■ 目の不自由なへび

雨が降らず、異常高温が続いた夏がようやく通り過ぎていこうとしている。

近づいてきていた台風は房総半島の手前で大きく東に逸れ去ったようだが、それと関係があるのかどうか、東京では昨日から久々に雨らしい雨が降っていた。

エアコンの存在を忘れて過ごせる日は久しぶりだった。

息子の宗太郎は今日は朝から家にいる。先週の土曜日が運動会だったので、その代休だそうだ。

第二土曜日が休校になったのはいつからだったろうか。最初の土曜日は、テレビニュースに魚のつかみ取りをする小学生の映像などが盛んに映し出されていたが、今はもう、この少しだけ特別な土曜日を意識するイベントは自然消滅してしまったようだ。

離婚届を提出し、私が旧姓の「里見」に戻ってから、一年以上経った。最初は「学校で呼び方が変わるの面倒だよ」と嫌がっ

ていた宗太郎も、ようやく「里見君」と呼ばれることに違和感を  
感じなくなってきたようだ。

前夫・倉掛修治朗は、私が予想していたよりもすんなりと離婚  
届に捺印した。

「慰謝料は払いたくないな。ただし、もしも宗太郎が君と一緒に  
暮らすことを選ぶのなら、養育費は十分に保証したい」

離婚の話を切りだしたとき、前夫はいきなりそんなことを言っ  
た。

私との暮らしに何の未練もないらしいことはいささかショック  
だった。

それまで、どちらからも離婚のことなど口にしたこととはなかつ  
たのに、まるで待っていたように話に応じた夫。

私はそれ以上、突っ込んで話をする気にはなれなかった。

夫に女がいるらしいことは分かっていたし、仕事のこととも秘密  
が多かった。それでも、たまに家に戻ってきたときは、ごく普通  
の夫であり、父親だった。世間にはもっと夫婦の会話や父子の交  
流がない過程というものはいくらでも存在しただろう。

「いいのね？」

「君が望むなら仕方ないだろう」

私が離婚を切り出して一時間もしないうちに、結論は出てしま  
った。

「なぜだ？」という問いを、彼は結局一度も口にしなかった。私  
と結婚したことや、子供を作ったことを、それほど否定的に捉え  
ていたのだろうか？ 私のほうが逆に「なぜ？」と問い返したか  
つたが、彼の思うつぼにはまる気がして、できなかつた。

私はなぜ離婚したのだろうか？

今でも不思議に思う。

意外だったのは、宗太郎までもが、まるでその日が来るのをず

つと前から予期していたかのように、素直に運命を受け入れたことだった。

「僕はやっぱりママと一緒に暮らすんでしよう？」

そう言って私を見上げた目に、涙はなかった。

買ってまだ間もない家は売りに出された。

ピークを過ぎたとはいえ、バブル経済のおかげで相場は買ったときの倍近くになっていたが、なかなか買い手はつかなかった。

この家を購入する資金はすべて夫が出していた。しかし「それまでの共同生活で君が担ってきた家事労働への報酬があつてしかるべきだから」という理由で、夫は売却益の一割を私にくれるという。あくまでも「慰謝料」という言葉を使うことは拒否した。

夫が浮気をしていることは確実だったから、探偵でも弁護士でも雇ってその点をはつきり追求すべきだと進言してくれる友人もいた。しかし、私はそういう方向で話を泥沼化させるのだけはごめんだった。

一度だけ、夫の母親から私に電話があつた。

何が原因なのか、宗太郎はどうするのかと、矢継ぎ早に質問を浴びたが、適当にかわしてしまった。

私の両親は、私が結婚する前後に相次いで亡くなっていた。

まだ六十台半ばで親を送ったときはショックだったが、今となってみれば一人娘が子連れで離婚するという事態に遭遇しなかったことだけは幸いだったのかもしれない。

売りに出してから半年でようやく家が売れたとき、ポチが死んだ。

突然物を食べなくなつたかと思うとみるみる衰弱し、足腰が立たなくなつた。

獣医が原因を突き止めるのを待たずに、ポチは死んでしまった。「神経系統の病気であることはほぼ間違いない気がするんですよ

ね。解剖してみれば原因もはっきり分かるんでしようが、もう死んでしまったしねえ」

首を傾げながらそう言う獣医に礼を述べ、私はポチの亡骸が入った段ボール箱を車のトランクに積んだ。

家の売買契約が成立した翌朝のことだった。

もちろん、一戸建ての家を手放した後もポチの面倒は責任を持って見るつもりではいたが、心の奥を見透かされたようで辛かった。

ペット動物専用の火葬場へ運ぶ前に、私は段ボールの中に横たわったポチの耳に触れてみた。

ポチの耳は驚くほど冷たかった。

私が知らなかった感触。

小さな骨壺に入ったポチを連れて火葬場から家に戻ってきた後も、宗太郎はなかなか泣き止まなかった。

その涙を見て、私は少しだけほっとした。

ポチがいなくなり、二人だけになった私たちは、町田市の2D Kのアパートに引っ越した。

居住面積は今までの半分になった。

何よりも辛かったのは、台所の狭さだ。シンクなどは洗面器ほどの大きさしかない。

母子二人暮らしとはいえ、食事の後、シンクはたちまち食器で溢れて使い物にならなくなった。

私はますます料理嫌いになった。

アパート暮らしが落ちつくくと、私はし子をはじめ、何人かの友人に頼み込み、翻訳やライターの仕事回してもらった。世間は厳しい不況に突入しかけていたが、幸い、私鉄やデパートを持つ大手企業のPR雑誌を下請けしているプロダクションから、毎月一定の仕事が入るようになり、母子二人でなんとか食べていける

だけのお金は稼ぎ出すことができた。

前夫からは、宗太郎の養育費名義で毎月二十万円が私の口座に振り込まれてくる。宗太郎が就職するか、二十五歳になるまでは支払い続けるという約束が交わされていた。

二十万円という金額は彼の方から一方的に言い出したものだ。私は少し悩んだ末に承知した。予想していたよりも高い金額だったが、そもそも彼からどんな名義であれ、今後経済的援助を受け続けること自体に、最後まで抵抗があつたのだった。

だが、この二十万円がなければ、今の私たちの生活は相当苦しいものになっているはずだ。

「夫婦としての義務だけがなくなつて、夫が運ぶ給料だけが入ってくるみたいなものね。いいなあ」

L子はそう言って、本当に羨ましそうな顔をした。

あれだけ騒いでいたL子のほうは、なぜか未だに離婚していない。ペーターは相変わらず合成ゴムメーカーに勤めて、毎日パソコンとにらめっこしているそうだし、L子は文句を言いながらも花ちゃんの育児に追われ、ジャムを作り続けている。

。

宗太郎の部屋から、テレビゲームの音が聞こえてくる。

学校が休みの日は、朝からこれだ。一時、かなりうるさく注意したり、ゲーム機を取り上げたりしたこともあつたが、最近はこちらも疲れてしまい、放任しがちだ。

それに、一緒にやってみると確かに中毒性の高い、面白いゲームがある。同じゲームを母子別々にセーブしながらやったりもする。

私は朝食の後片づけをすませると、自分の仕事机の上にあるタワー型のパソコンに灯を入れた。

一日のうち最初に起動した直後には、自動的に大手のパソコン通信ネットに接続され、電子メールや決められた電子会議室の発言などを取り込む作業をしてくれる。

作業の進行に従って、パソコンは犬や猫の鳴き声を発する。一時は「おはよう」「お疲れさまです」「待つてね」など、人間の声をセツトしたこともあったのだが、あまりにも寒々としているので動物の声や花火の打ち上げ音などに代えてしまったのだ。もちろん、何も喋らないパソコンがいちばん無難なのだろうが、パソコンに「喋らせる」設定を楽しむ程度には私もマニアになってしまったということだ。

ネットからダウンロードするデータはいつもよりかなり多めで、随分時間がかかっていた。ようやく「ワン！」という鳴き声がし、作業が終了したことを告げる。

これは死んだポチの声だ。

ポチが映っている8ミリビデオのテープから鳴き声を拾い出し、パソコン用の音声ファイルにしたものをセツトしている。

宗太郎が喜び、最初の頃は台所仕事をしている私のところにやってきて、「ママ、ポチが呼んでいるよ」などと嬉しそうに言っていたものだ。

ポチに呼ばれてパソコンの前に座り、今落としたばかりのデータファイルを開いてみる。

電子メールは二件入っていた。

〔シェーンレーベ江梨子 KH12641B〕

題名：残暑お見舞い

元気ですか？ 九月も半ばになろうとしているこの時期に「残暑」ってのもおかしいけれど、今年は本当にそういう感じよね。

先日は俳句季語の辞書ファイルをどうもありがとう。「電子メールで送ると結構時間がかかるからフロッピーでの郵送にします」

というだけあって、力作ですね。私にはとても使いきれないので、周りにいる俳句愛好者に……と思ったのですが、考えてみるとパソコンを扱える俳句愛好者なんてほとんど知らないのですよ。

このままでは宝の持ち腐れになるので、ペーターの友人のプログラマーに渡して、何かこれを利用したソフトが作れないかどうか相談してみようと思います。例えば「俳句自動作成ソフト」とか、季重なりや字余りを検出する「俳句添削ソフト」のようなのができれば面白いのではないかと思うのですが、こういうのは祥子の望むところではないかもしれませんね。嫌ならばそう言うてください。ただ、私としてはこれだけの労作を祥子のパソコンの中だけに眠らせておくのはちよつともつたいない気がして。もちろん、このファイルの著作権などはしっかり主張するように注意はします。ご返事ください。

追伸：最近パソコンの取り合いが激しいので、やはりもう一台購入しようかという話になっています。なんだかパソコンに振り回されているようで、情けなくなります。」

私は悟の『現代俳句への挑戦』を思い出して苦笑した。

そういえば『ポチの友』はもう一年以上届いていない。

二通目の電子メールは仕事の依頼だった。

〔明石基子 SB14578H〕

題名：翻訳依頼

ご無沙汰しております。このところの不況で翻訳業界は大打撃ですが、久しぶりにドイツ語の翻訳の仕事が入りましたのでお願いいたします。内容は新薬の実験データと解説で、専門用語がかなり入っているので骨かもしれません。約1500語です。締め切りは月末ですが、お引き受けくださる場合は……」

明石さんは大阪で翻訳のエージェントを経営している。彼女とはこのパソコンネットの中の「現代文芸フォーラム」というフォーラムで知り合った。

驚くべきことに、何度か仕事を貰っているながら、私は未だに彼女の顔はおろか声さえ知らない。つまり、電子メール以外で彼女と意志を通い合わせたことがないのだ。

これはやはり異常なことだから、近いうちにせめて電話をかけて声だけでも知っておきたい。しかし、電子メールだけのやりとりが続くと、なぜか電話をかけるのも気が引けてしまうようなところがある。まるで相手の姿や声を確認するのがタブーであるかのような気持ちになってくるのはなぜだろう。

二通の電子メールの後には、私が趣味で入会している「現代文芸フォーラム」の俳句の会議室（このパソコンネットでは、会員の自由な発言の場をこう呼ぶ）への新しい発言がダウンロードされている。

俳句の会議室は「なかしち倶楽部」という。この会議室は、「潜流」という、まだ歴史の浅い俳句結社と連動している。「潜流」には、ジョークのような川柳しか作らない若い愛好家から、本格派のベテラン作家まで、多種多彩な顔ぶれが揃っている。結社に参加するという気負いもなく楽しめるのが気に入って、私もよく作品を発表している。

いつもより少し多めの俳句作品が書き込まれていたが、これといった光ったものは見あたらなかった。

その隣には短編小説やショートショート創作作品を扱う会議室がある。ここでは、最近、ある作品の評価をめぐって活発な議論が巻き起こっていた。

今回も、新しい創作作品はなく、その議論の続きがいくつか書



き込まれていた。

「……要するにこの作者は、現代の言葉狩りの問題の本質をまったく分かっていないわさ。それにそもそも、こういう作品をこの会議室にアップすることで、このフォーラムのシスオペや、ひいては通信ネットワークそのものが外部から攻撃されうるという事態を想定してのことなのだろうか？ 書き逃げはするいぜ……」

「……作家にとっての言葉狩りという問題と、出版業界全体にとっての言葉狩りの問題は本質的には違うと思うのです。某作家が「断筆宣言」をなさったのは、どちらかというところと差別を錦の御旗として攻撃してくる団体ではなく、むしろそうした攻撃に及び腰になって、作家の発言の場さえ奪おうとしている出版側への絶望からでしょう……」

そろそろ読み飽きた論調の文章がいくつか並んでいる。

私は軽く読み飛ばすと、通信ソフトを閉じた。

この議論の元になっている作品は『目の不自由なヘビ』という短編で、一週間ほど前にこの創作会議室にアップ（書き込み）されたものだ。作者の名前は「けい」となっている。男性なのか女性なのか、はたまた年齢がいくつなのかもさっぱり分からない。「けい」というペンネームでの発言も初めてだった。

普通は作品を発表する前には、「談話室」という名のフリーボード専用の会議室に自己紹介の文を載せ、その後いくつかの発言を重ねて会員たちに名前を知られるようになるという手順を踏むものだが、この「けい」氏はそうした暗黙の作法を完全に無視して、いきなり前コメントもなくこの作品を発表したのだった。

常連が別名を名乗って発表したのか、それとも全くの新人会員による作品発表なのかも分からない。

物好きな会員がいて、ID番号から会員登録データを検索したところ、現代文芸フォーラムへの入会は半年も前のことだという

ことが分かったそうだ。だとすると、半年間、自らは発言せずに、ひたすら他の会員の発言を読むだけの存在だったのだろうか（こういうのをパソコン通信の世界では「ROM」という。READ ONLY MEMBERの略らしい）。私も、少なからずこの作品と謎の作者については興味を持っていた。もしかしたら、プロの作家が悪戯心で発表したのかもしれないなどと、想像をめぐらせたりもした。こんな作品である。

〇〇〇

目の不自由なへび

けい

「別所教授、サドウスキー生物学会賞受賞

荻窪大学の別所英幸教授（生物学）が、生物学会では世界的権威を持つ「サドウスキー生物学会賞」を受賞した。受賞の対象となった研究論文は「ブルーミニメクラへビにおける三倍体染色体遺伝の諸研究」で、雌だけで単為生殖をするブルーミニメクラへビの遺伝子研究を基に、大型哺乳類のクローン再生などにも応用できる可能性を秘めた諸理論を確立した功績を称えて贈られたものの」

世界的に権威のある賞というわりには、それは随分と慎ましい新聞記事だった。

もつとも、爬虫類の研究などという地味な分野に、こうした賞が与えられること自体希有なことだから、贅沢は言えないのかもしれない。

事実、日本人として初めてこの賞を受けたというのに、受賞者

の別所教授の周辺はごく静かなものだった。

研究室の仲間が三千円ずつカンパを出し合い、「珍珍軒」の二階座敷を借りきってパーティを催してくれた程度のものだ。

新聞に発表された日なども、何本かの祝電くらいはあるだろうと身構えていたのに、午後になっても彼の研究室には電話一本かかってこなかった。

拍子抜けのまま、もう家に帰ろうかとしていた夕方五時半頃、その日初めての電話のベルが鳴った。

「わたくし、表現審議委員会の清水と申します。このたびはサドウスキー賞の受賞、おめでとうございます」

電話の主は、ごく冷静な声でそう言った。

「いや、どうも……」

反射的に返事はしてみたものの、別所教授には、相手の声にも名前にも心当りはない。

困って黙っていると、清水と名乗った男はこう続けた。

「いや、しかし驚きましたよ。今どき、天下の大新聞紙上であるような文字を目にするとは……。これは私ども審議委員会のテポッチですね。どうやら生物学の分野までは目がいき届かなかったようです」

「はあ？ 何がどうテポッチなんですか？」

「いやいや、ブルーミニメクラヘビ……。ですか。これがサペツソではないかと」

「ブルーミニメクラヘビがサペツソ？ どういう意味ですか？」

「やはり先生もご存じないと……」

相手は多少芝居がかった口調で言った。

別所教授は少しむっとしながら答えた。

「分かりませんね、どうも。ブルーは青い、ミニは小さい、メクラヘビは学術用語で……。メクラというのは何語かなあ。多分ラテ

ン語だと思えますけれど、どこがどうサペツソなんですか？」

「それが違うのですよ。私も最初はそう思っていたのですが、うちの審議委員長鹿島という者がですね、このメクラというのはかつては日本語だったのではないかと言うんですね」

「メクラがですか？ 初耳ですね。しかし、私は国語学者じゃないですから、そんなことは……」

「ええ、ええ、分かります。でも、先生の高尚なご研究のおかげで、この日本語が甦ってしまったわけですよ。これまで私たち一般国民は、メクラヘビなんていうものを知りませんでしたからね。そもそもヘビなどというものを見る機会がほとんどないわけですから」

「そう言われましてもね。私はサペツソなどという意識は微塵も……」

「分かります分かります。無理もないでしょうな、わたくしども、専門家でさえうつかりしておったくらいですから。ですから先生を弾劾しようなどということではないんです。単純なご相談なんですよ。後れ馳せながら調べたところ、爬虫類トカゲ目ヘビ亜目の下にメクラヘビ下目というのがあって、メクラヘビ科、カワリメクラヘビ科、ホソメクラヘビ科というのがあそうですね。メクラという言葉がつくものは他にはあるんですか？」

「おのおのの科に属するヘビには全てそういう名前がついていますが」

「はあ……例えば？」

「テルネツツサカヤキメクラヘビとかスボクラリスハシメクラヘビとか……いくらでも」

「うーむ、そうですね。困りましたなあ。それをなんとかしないことには」

「はあ？」

「せっかく葬り去ったサペツソ語が、たかが日の不自由なへびごときのおかげで甦ってしまおうというのは困りますからね」

「たかがへびとは、へびたちに対して随分サペツソ的な発言じゃないですか。へびの研究者としては聞き捨てなりませんね」

「いや、失礼。これは私としたことがテポツチでした。とにかく、そのメクラへびの改称について、ぜひ学会の第一人者でおられる先生からお知恵を拝借したいので、一度こちらへご足願えませんか？」

役所が「ご足願いたい」と言ってきたとき、拒否して得するためにはまずない。ただでさえ爬虫類研究などという地味な分野は、ほぼ百パーセント国家からの助成金で成り立っている。

別所教授はやむなく「分かりました」と答えた。

表現審議委員会は文部省の建物の地下にあった。

隣は天然ガスを使ったボイラー室。今や定置エネルギーは天然ガスを使ったコージェネが中心だが、このビルのシステムは相当旧式らしく、ボイラー室から音や熱が漏れてきているようだ。それにしてもこんな場所に押しやられているとは、相当暇なセクションなのだろう。

「ハハハ、お恥ずかしい。かつては相当羽振りのいい時期もあったそうなんですがね、ご存じのように今ではサペツソはほぼ完全に克服され、サペツソ表現などというものも化石のようになってしまいましたからね。我々も仕事がないのですよ」

別所教授を迎え入れた中年男は、苦笑しながらそう言った。

部屋には電話をかけてきた清水というその中年男と、壁際で難しい顔をしている白髪の老人の二人しかいなかった。

「私が審議委員長の鹿島です。来年定年です。最後のご奉公というところです。ムオツフォンヒョヒョ」

鹿島老人ははつきりしない発音で挨拶した後、大きな咳払いをした。

来年定年ということは、もう六十に手が届くということだ。今時、定年まで仕事を続ける人間など、滅多にいない。癌やエイズ、そして数々の毒物アレルギーなどで平均寿命が男女ともに五十歳を切っている現代では、六十歳定年制自体が一種のジョークなのだから。

「メクラヘビというのがサペツソにあたるのではないかというお話でしたね。しかし、現代人の何割がメクラなどという難しい専門用語を知っているでしょうか。今さらこれを変えようなどというのは、意味がないんじゃないですか？」

別所教授は前振りなしで、いきなり本題に切り込んだ。

「いや、そういう油断が大敵ですよ。我々が世界に範たる平和で平等な国家を築くために、今までどれだけ大変なサペツソとの戦いがあったことか。症例が報告されなくなってから二百年は経っていると言われる狂犬病の予防注射が今でも義務付けられているのと同じでしてね。サペツソの根はまだまだ見えないうちに巣食っているかもしれない。それを根絶するのが我々の役割なんですよ。後追い行政などと批判を受けないためにも、小さな芽のうち摘んでおかないと。そのへんはひとつ、ご理解いただきたいですな」

鹿島氏は無表情のままそう言った。

「しかし、メクラがかつてサペツソ語だったなどという証拠があるんですか？」

「はい」

代わって答えた清水が、旧式の光ディスクを取り出し、これもまた今ではほとんど見ることがなくなった旧式の光ディスクドライブに挿入した。

コンピュータの画面に、見慣れない言葉が写し出された。

「メクラ、オッシ、トウンボウ、ピッコ、ティンバア、カタティンバア、デツブ、プス……」

別所教授が不審そうな顔で画面を覗きこみながらそこに写し出された文字を読み上げていった。

「何語ですか？　これは」

「二十世紀末頃までに存在した日本語です」

「古語ですか。しかし、死語になってしまったわけでしょうか？　どうでもいいじゃないですか」

「そうはいきませんよ。先人たちの、サペツソとの血の出るような戦いを思えば、その勝利を今になって綻ばせるわけにはいかないですからね。たとえ専門用語の中に生き残っていた死語だとしても」

「はあ……そうですか。私、根っからの理工系なもので、そういう文学的方面には不案内です」

「理工系だろうと体育系だろうと関係ないですよ。教授、どうですか？　いい機会ですし、ここで少し、サペツソの歴史について学んでいかれたら……」

清水が薄笑いを浮かべながら言った。

「いえ、そんな時間は……」

「交通違反に対するちよつとした講習のようなものですよ。あなたのような第一線で活躍される学者さんにこそ、サペツソの基礎知識は知っておいてもらわないと」

清水はほとんど命令口調だった。

冗談ではないと思いつつも、別所教授は感情をぐつと堪えた。役所を相手に喧嘩をしたくはなかった。ただでさえ乏しい研究費をこれ以上削られたりでもしたらたまらない。

仕方なく、別所教授は、暫く暇な役人の話につき合うことにし

た。

ここに『サペツソ表現克服の歴史』という名著がありますが、これによると二十一世紀初頭くらいまでは、とんでもないサペツソ表現がうようよあったらしいですな。

サペツソ表現というのは大きく分けると九つのジャンルになるのです。これを「暗黒のナイン・サペツソズ」と呼んでいます。まず最初に、身体的ハンデイを表す言葉ですね。そういうのが、昔は存在したんですねえ。驚くべきことです。

例えば「ドームの外野席」という表現は、大昔は「トウンボウ 棧敷」と言ったそうなんです。トウンボウというのは「耳が不自由」ということを示す言葉なんです。驚きでしょう？ そんな言葉が存在し、使われていたなんてね。

なにしろ、運動会に「障害物競争」というとんでもない名前の種目があったりした時代ですからね。

え？ 障害物競争ですか？ 今の「バラエティレース」のことですよ。梯子潜ったりするやつね。

「片手落ち」なんていう、ぎよっとするような表現もあったらしいですね。今で言う「ふてわび」のことですね。

例えば、「Aには説明しておきながらBには説明しないなんて、ふてわびというものでしょう」なんていうときに使う「ふてわび」のことです。

一説には、かつてテレビの放送で「片手落ち」という表現を使う度に、番組の最後で、「番組の中で不適当な表現があったことをお詫びします」と言っていたので、それが重なるうちに、不適当のフテとお詫びのワビを取って、「ふてわび」という言葉が発明されたなんていうんですが、真偽のほどは分かりませんね。

二番目には、身体的ハンデイ同様に、知能や精神が未発達だった。



たり錯乱している様子を表す言葉ですね。

そういうものを限定的な単語で表してはいけないことくらい現代では常識ですが、昔はあったんですよ。「精神が不自由な方」のことを「基地外」なんて言っていたそうです。フレドリック・ブラウンの名作『さあ、精神が不自由な方になりなさい』も、かつては『さあ、基地外になりなさい』なんていうタイトルだったといえますから、恐ろしいですね。

ドストエフスキーや坂口安吾の『白くかすんだ知性』も、何か別のタイトルだったという説があるんですが、今では当時の本が残っていないので分かりませんね。

三番目に、職業を表す言葉として、今では全く意味不明なんですけど、「床屋」「おまわりさん」「八百屋」「肉屋」「百姓」などという言葉が存在していたようです。

怪談の『青果業者お七』が、かつては『八百屋お七』と言っていたというんですが、意味が通じませんなあ、これでは。八百なのか七なのか、足せば八百七ですが……。

それから童謡にあるでしょ、『犬の巡査部長さん』というのが、これが昔は『犬のおまわりさん』だったというんですが、このへんになるとさすがに嘘でしょうな。子供に歌わせる歌にそんな表現があったなんて、とても信じられませんからね。

四番目として、職業についていない自由人や、民間からの善意の福祉行為にのっとって生活されていらっしやる方々に対しても、ズバリ『コジキ』などと呼んでいたという説があるんですが、なぜ日本最古の書物の名前と同じなのか、不思議な話ですね。

五番目に、人種サペツソや、血筋、出身地サペツソに関する語というのもあったようですね。「シノーコーシヨー」……これ、何のことでしょうかね。

そういえば広告業界の人間が無礼講の宴会などで歌う、意味不

明の歌がありますよね。「ダイリテン、シノーコーション、プロダクション……」というあれですが、どういう意味なんでしょうねえ。

それから、「下請け」「孫請け」……これも何のことだか分かりませんねえ。

六番目に、女性であることを区別する表現というのがありましたね。「スーパーパーソン」「ウルトラパーソン」「スパイダーパーソン」が、昔はそれぞれ「スーパーマン」や「ウルトラマン」などと言っていたようですが、信じられませんか、そういう神経は。

成人女性を指して、「受付の女の子」なんていう呼び方があったという話に至っては、もはや何をか言わんのバラライカです。

七番目に、言葉ではなく、形で表現するサペツソというのもありました。これを見てください。これ、何だか分かりますか？

左から、テング、ヒョットコ、オカメというんだそうです。かつてはとてもポピュラーだったお面だというんですが、こんなものが堂々と公衆の目の届くところに飾られていた時代なんて、信じられますか、あなた？

それから、この目が三日月型になって、シルクハットをかぶっている細面の人のマークは、ある清涼飲料水メーカーの商標だったようですが、これなどはあなた、このテングだのオカメだのという恐ろしいサペツソ表現に比べたら、ミロの芸術のような高貴さを漂わせていますよねえ。

そうそう、テングは漢字では「天狗」と書いたそうなんですケモノヘンの漢字を人間を表す表現に使えた時代もあったんですねえ。「くるう」という字が、昔はリッシベンじゃなくてケモノヘンだったという記録も残っています。恐ろしいことですね。

これは「リリカちゃん人形」と呼ばれて、昔は人気があった玩

具だそうですが、白人至上主義を如実に表す人形が日本で売られていたなんて、ひどい話です。

その隣は珍品中の珍品ですよ。ゴルビー人形というのだそうですが、これも恐ろしいでしょう？ 頭の部分に地図の模様が入っているでしょう？ モデルが実在したのかどうかは分かりませんが、いたしたら本当に恐ろしいことですね。

八番目に、動物に対する差別というのが唱えられたことがあったそうです。

「狸おやじ」とか「狐目の男」「ブタ野郎」「馬づら」「権力の犬」といった表現は、狸や豚や犬の尊厳を著しく傷つけるものだという主張が、一部の動物権利代弁グループから出されたそうですが、これは却下され、逆に、ケモノヘンの漢字が使えなくなっただけのように、人間を動物に喩えることが禁止されたわけですね。

最後に、特定の国名が使われた表現をなくそうとした動きも記録されています。

これが難解でして、よく分からないんですね、今となってはどいうことなのか。

例えば、ソープランドのことをかつて「ルートコ」と言っていたという説があるのですが、今も昔もルートコという国はないですからね。これなどは何かの間違いでしょう。

同じように、「南極ちゃん」のことを昔は「ダッチワイフ」などと言っていたというんですが、オランダ製の南極ちゃんが特に性能がいいという話は聞きませんし、これも意味不明ですね……。

清水氏の講義は延々一時間あまりも続いたが、別所氏はじっと耐えて耳を傾けた。

一通りの「サペツソの歴史講義」が終わると、「メクラヘビ」

という専門用語をどういうふうに変えるかという本題にようやく進んだが、これは簡単に結論が出た。「メノフジユウナヘビ」である。

審議迅速を旨とする昨今のお役所のことだから、明日にでも審議委員会に提出され、即可決されるだろう。

これによって、別所教授が研究していた「ブルーミニメクラヘビ」は「ブルーミニメノフジユウナヘビ」という名称に変わることになるが、それによって別所教授に何らかの実害が及ぶというものでもない。せいぜいコンピューターの記憶装置に単語置換コマンドを送り、今までのファイルにある無数のメクラヘビをメノフジユウナヘビに変えるという手間がかかる程度のことだ。

別所教授がようやく解放され、建物を出たときには、もう日はとっぷりと暮れていた。

思わず大きく深呼吸する。

この胸の中を吹き抜ける渴いた風は何だろう。言い様のない閉塞感は何だろう。

教授は気分転換のために、政府公認の快樂追求娛樂地区に足を運んだ。

色とりどりのネオンサインが、善良な市民を迎える。

「野鳥撃ち放題樂園・地球大好きアイアンキング」「犬・猫・兎叩きゲームハウス・あんたが大将」……。

表現の世界から動物の擬人化が追放された二十一世紀後半頃から、こうした動物虐待ゲームが静かな人気を呼ぶようになり、公認されていった。今ではこの手の娛樂産業は、セックス産業以上に人気がある。

どぎついネオンを見ながら、別所氏はふと考えた。

表現の世界から追放されたエネルギーの一部が、もしかしたらここに吹きだまっているのかもしれない……と。

当初、この作品の後には一様に誉める評ばかりが続いた。

しかし、やがて、「それほどのものか？」 「書き手の精神の方がむしろ俗悪だ」 「他人の禰で相撲をとろうというこざかしさに反吐が出る」といった批評が現れ始めた。

比較的紳士淑女が集まっているこのフォーラムで「反吐が出る」というようなきつい批評が書き込まれることは極めて珍しいことだった。

それに刺激されてか、常連同士がかなり厳しい議論の応酬を始めた。言葉刈りをめぐるトラブルがもとで「断筆宣言」をした有名作家の話題も蒸し返された。

しかし、それも一週間が過ぎ、そろそろ鎮静の方向に向かっていくように思える。

この間、作者は沈黙を守っていた。

これだけさまざま意見が出ているのだから、ぜひ作者自身の意図や見解を聞きたいという呼びかけもあったが、〈けい〉氏からの反応はまだない。

私も一度だけ、公開の会議室ではなく、〈けい〉氏に直接電子メールで簡単な感想を書き送ったことがある。

「けいさん、はじめまして。現代文芸フォーラムに出入りさせてもらっているSHOWと申します。

『目の不自由なヘビ』、楽しく読ませていただきました。議論が噴出しているようですが、これからも作品が続いて発表されることを楽しみにしています。

批評にはかなりの外れなものも見受けられ、失望されているのかもしれませんが、あまりにも孤高のポーズをとり続けていると、

不必要な孤立を招くかもしれません。それがちよつと心配です。正体不明のままでも結構ですから、批評に対して多少は発言なさってはいかがでしょう。

それと、もしご迷惑でなければ、私の感想を、個人的に電子メールで送ってもよろしいでしょうか？ 後込みしているわけではないのですが、公開の場での討論を見ていると、このところますます論点がずれてきているように思えて、あの後に今さら何かを書き込むのは気が進まないのです。

とにかく私はへけいゝさんの他の作品ももっと読みたいと思っています。次の作品を楽しみにしております」

送った後、少し後悔した。余計なお世話だと思った。

離婚し、仕事の必要に迫られてパソコンを買い、通信を始めるようになった。一年半が経つが、これまで、未知の相手に電子メールを送るなどということは一度たりともしたことはない。それに、パソコン通信では相手の顔が見えない。とてつもなく陰湿なやつで、これを機に私にねちねちとした電子メールを送り続けてくるなどということも、ありえないことではない。

誰かが雑誌の中で書いていた。パソコン通信の世界には、数えきれないほどの魑魅魍魎がうごめいていると。

私は自分のうかつさを反省し、送信した電子メールを削除しようと思つて、一時間ほどしてから再びネットワークに接続したが、なんと、タイミングが悪いことに電子メールは受信された直後だった。

私はこのネットでは本名を公開登録している。原稿のやりとりなど仕事で使っているの、いざというとき本名の「里見祥子」でID番号の検索ができなければ不都合が生じることもあるという判断からだ。しかし、女性名での登録は、俗に言う「ナンパメール」などが舞い込むことにもつながるということを、そ

の後学ぶ羽目になった。

現代文芸フォーラムの中では、私は〈SHOW〉というハンドル（このネットワークではこうした通信でのペンネームをこういう）を使っている。これなら女性だとは分からないだろうと思っただのだが、中にはID番号から会員情報を検索し、本名を割り出す暇人もたくさんいるらしい。

もともと、離婚して一年半経つ三十七歳の「子持ち独身女性」にとつて、半匿名でのこうしたやりとりは適度に楽しくもあった。十代の文学青年から、熱い文学談義を持ちかけられたりすることもあった。自分にもこんな時期があったのだろうかなどくすぐったい思いを楽しみながら、適当に相手をしたりする。離婚してから、私の精神は確実に若返った気がする。

〈けい〉氏への電子メールを送信してから三日後、いつものように通信ソフトを使ってダウンロードしたログファイルを見ていた私は、いきなり思いもかけない人物からの電子メールにぶつかり、仰天した。

〔澤田径士郎 VB23415N ……〕

ケイシロウ……その名前の響きが、私を急速に二十年近く前の記憶の中に引きずり込んだ。

私が大学に入って初めて心を惹かれた二年先輩。そして、初めて肌を合わせた男。

出逢いも、別れも、なぜか今ではよく思い出せない。なぜ別れたのかさえ思い出せない。ただ、若さに任せて熱くなっていた期間の思い出だけが断片的に残っているにすぎない。

径士郎は一年留年したので、卒業は私より一年早いだけだった。その後どうしていたのだろう。風の便りに、予備校の講師をしているらしいとか、まだ小説を書いているらしいとか、結婚したらいいというようなことは聞いていた。でも、それ以上、自分から

知ろうとはしなかった。無意識のうちに忘れようとしていたのかもしれない。

私は鼓動が少し早くなるのを自覚しながら、パソコンの画面の中に映し出された横書きの文字列をゆっくりとスクロールさせていった。

〔澤田径士郎 VB23415N〕

題名：やあ

様子から電子メールが届くとは思ってもよらなかったことなので、びっくりしました。今でも分からないのですが、これは偶然ですか？ それとも僕だと分かっていてのことですか？

その書き出しを読んで、私のほうがはるかに驚いた。

最初は意味が分からなかった。径士郎のことなど、正直な話、記憶の中からは消えかけていたし、ましてやパソコン通信ネットワークの中で再会しようなどとは、私のほうこそ夢想だにしなかった。

分からないままに、私はメールを読み進んだ。

〔現代文芸フォーラムで、「SHOW」というペンネーム（「ハンドル」なんぞというパソコン通信用語は使いたくない）の人物が、時折鋭い批評や味のある俳句作品を書き込んでいることは大分前から気がついていました。でも、それがまさか君だとは今の今まで気がつきませんでした。僕の場合と違って、君は会員情報に本名を公開しているようだから、ID番号から調べれば分かっただけなのだけれど、僕は今までそういうことをしたことがないしね〕

そこまで読んで、ようやく事情が呑み込めてきた。

この巨大パソコンネットでは、会員が自分の本名を公開していない場合は、電子メールを送っても相手先はIDナンバーが表示されるだけなのだが、逆に受信者側には、送信者の本名が明示さ



れることになっている。電子メールを使った違法な商売や、一方的な誹謗中傷事件を防止する意味合いからだ。

私が電子メールを送った相手である〈けい〉氏こそ、澤田径士郎だったのだ。

私は緊張しながら画面をスクロールさせ、メールの続きを読むだ。

「とりあえずは近況報告などしてみますか。僕は今、東京都の外れ、奥多摩町というところに住んでいます。

卒業して間もなく結婚して、早くも結婚生活十五年。子供はいません。意志的に作りませんでした。妻のほうは子供を望んだのですが、僕のほうが頑として応じませんでした。三十を過ぎてからは妻もほとんど諦めて何も言わなくなりました。

あ、そんな話はどうでもいいか。

現在はほとんど世捨て人のような暮らしです。家賃二万円ながら、妻と二人で住むには広すぎる農家に借家住まい。借りている畑でずぼらな野菜栽培をする傍ら、近所の子供たちを集めて塾の真似事のようなこともしています。

毎晩タヌキの親子が現れ、残飯を漁っていきます。ときにはムササビが屋根の上を走り回ることもあります。朝は野鳥の声で目覚め、夜は窓から満月を見ながら風呂に入り、本当に浮き世離れた毎日です。

それでも都市文明の脅威は身近に迫ってきていて、最近は何所に計画されている産業廃棄物処分場建設を阻止するためにいろいろと動き回ったりもしています。

学生運動からは卒業と同時に足を洗いましたが、その後もあちこちで反原発運動や環境権確立運動などに草の根的に関わっていたので、役場の人間からは結構煙たがられています。

たまに雑多な原稿を書くこともありますが、原稿料で食べてい

けるほどコンスタントなものではありません。草の根的なミニコミ媒体へ、原稿料なしで書くものも多いしね。

十年ほど前、幸運が重なって、三百枚の小説がある文芸雑誌の新人賞の佳作に入選し、本を一冊出すことができました。経済功利主義に破壊されていく農村を舞台にした、かなりメッセーじ色が強い作品でしたが、まったく売れず、以後、書いても書いても本にはならないという状況が続いています。今でも細々と書いてはいますが、媒体へ発表するということはもうほとんど諦めています。「自然保護運動にかぶれた売れない作家」という評価が確立してしまったようで、どの出版社も相手にしてくれないのですね。でも、ときどき煩惱の虫がうずいて、この前のような駄文をパソコンネットに書き込んだりしているわけです。まだまだ悟りきれれていませんね。

現代文芸フォーラムは、他の似たようなフォーラムに比べれば会員の質も高いし、幹事役のシスオペ（これも何か嫌な言葉だね）もなかなかのバランス感覚の持ち主ですが、僕としては作品論、文学論をパソコン通信ネットの上で闘わせる気はしません。やりたいやつだけ勝手にやってくれという感じです。

だったらただの読者（「ROM」なんぞというパソコン用語も使いたくない）に徹していればいいじゃないかと言われそうですが、ときどき暴れ出す文章創作欲という煩惱の虫は、性欲と同じで、歳をとっていつてもなかなか消滅しそうでしません。人間の哀しさってやつかなあ。

まあ、そんなところ。

もしこれが偶然の悪戯で（つまり君が〈へけい〉が僕だということを知らないでこの前の電子メールをくれたのだとして）、君にとって僕とこんな形で再会することはまったく不本意、あるいは迷惑だとしたら、このままどうか無視してください。これ以上こ

ちらから呼びかけることはしません。

それにしても、電子メールというのはいいね。これが封書の手紙なんかだと、大袈裟になってなかなか書けないままになってしまっただろうな。

唯一、考えられる最悪の事態としては、君が万一ご主人のＩＤでアクセスしていて、この電子メールがご主人に読まれてしまうこと。まあ、それはないだろうと信じていますが。

（本当は「メール」というのも気に入らないのだけれど、こればかりは「手紙」という言葉では表せない新しい手段のことだから、仕方ない）

返事が貰えるのを期待しています。では。」

径士郎に返事を出したのは三日後だった。

電子メールを受け取ったその日は、何も手が付かず、一日中思い出に耽ったり、現在の、つまりもうすぐ四十になろうとしている径士郎の容姿などを想像した。

そしてもちろん、彼の奥さんの姿を。

子供を産んでいないというだけで、私よりもずっと若くて肉体的な魅力を持った女性のように思えた。

もしかしてその人の位置に、今、私がいたかもしれない……そんなことを考える自分が嫌だった。出逢っていないながら一緒にいなかったのだから、そこには何らかの意志が働いていたはずだ。彼と結婚して、奥多摩の自然の中で暮らしている自分を想像することはやはり間違っている。

私はなぜ彼と別れたのだろう。そのことを再確認するまでは、まともな返事が書けない気がした。

しかし、その核心部分がどうしても思い出せなかった。思い出せないということは、覚えているに値しない些細な理由からだった。

たのか、あるいはとりたてて理由やきつかけさえなかった別れだったのか。

ただ単に彼は私より先に卒業し、キャンパスに現れなくなり、自然消滅……いや、違う。恋に落ちていた時期は、一週間と空けずにデートを重ねていたのだ。二人とも実家から通っていたから、お互いの家を訪問するということはなかったけれど、乏しい財布の中身を見せ合ってから、安っぽいラブホテルの門を潜ったことも一度や二度ではない。

そうした日々が自然消滅したということはない。お互いに行き詰まり、苦しみ、「別れよう」と決意した上での別離だったはずだ。

会話に疲れたという面はあった。

彼は饒舌に哲学や政治の話題を語った。私はその聞き役に徹することができず、しょっちゅう対立した。デートの最中で喧嘩になり、帰ってしまったこともある。

そう、一度などは喧嘩になって背を向けて帰ってしまった彼を見送った後、このままでは後味が悪いと思い、駅の改札口で四時間待っていたこともある。

もう帰ろうとしていた頃、彼はなんと改札口の内側から現れた。「家に帰ってから、気を取りなおして電話してみたんだ。そうしたらお母さんが出て、渋谷の改札口で今も待っているはずだって……」

彼と別れてから私が改札口に向かうまで、ほんの数分しかなかった。私はまさか、彼がそんなにすぐに電車に乗って帰ってしまったとは思ってもしなかったのだ。渋谷の町をぶらぶらしてから帰るに違いないと思っていた。私がか家に着く頃を見計らって電話してくれるかもしれないと思い、一時間後、自宅に電話をして、母に「十時まではこのまま待ってみる」と言っておいたのだった。

彼はそれから、彼の自宅とは反対方向にある私の家まで送ってくれた。ところが、最寄り駅に着くまでの一時間の間に、私たちはまた口論を始めてしまっていた。

結局あの夜、キスもせずに別れたような気がする。そんなことが続いて、いつしか二人とも疲れ果ててしまったのだった。

その彼と、十五年以上の歳月を経て、今こうしてパソコンの画面を通して再会した。

何をどう書けばいいのだろうか？

お久しぶりです。あの頃のことを懐かしく思い出されます……とでも書き出せばいいのか？

悩んだ末に、私はこんな返事を書いた。

「ごめんなさい。返事が遅れました。

言葉に厳格なあなたに、どんなふうにも球を投げ返せばいいのか、かなり悩んでしまいました。憶病になったというよりは、慎重になりすぎたというほうが正確でしょうか。

でも、誤解しないでください。「不本意」だとか「迷惑」だなんて気持ちはこれっぽっちもありません。簡単な言葉を使うなら、ただただ「嬉しかった」。

懐かしいとか、愛しいとか、そういう感情をも超えて不思議な幸福感がわき上がってきた、という感じでしょうか。

まだ緊張していて、うまく言葉が続けられないのですが、もしよろしければ、これからもいろいろと話相手になっていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

私の近況報告は、次回にでも。まだ自分のことを語るだけの余裕ができていないので、ごめんなさい。とりあえず返事を書きたかった。あと一日悩んでいると、このまままた十年、二十年と時

が流れてしまう気がして。

お手紙、どうもありがとう」

たったこれだけの返事を書くのに、仕事の原稿を書く何十倍も  
の時間がかかった。

何度も訂正し、書いては削除して……ということを繰り返して  
いるうちに、疲れてしまった。

夜の十一時を過ぎ、混雑してなかなかつながらないネットのア  
クセス番号にオートリダイヤルをし続け、二十三回目でようやく  
送信することができた。

送った後、ホストコンピュータは「題名：」と訊ねてきた。

題名か……。

私は少し悩んだ末、径士郎からの電子メールの題名が「やあ」  
だったことを思い出し、「やあやあ」と入力した。

通信を終了した後も、私は暫く、動かないパソコンの画面を見  
つめながら放心していた。十分以上そうしていたのだろう、画  
面は暗転し、端から子豚が現れてブヒブヒと鳴きながら画面をゆ  
っくり横断し始めた。ときどきこちらを向き、「元気？」と問い  
かける。

十分間何も入力がないので、CRTの画面の焼き付きを防ぐス  
クリーンセーバーが自動起動したのだ。

私は机から離れ、本棚から地図を取り出した。

奥多摩町の位置を調べるためだ。

私が今いるこの町田市と、どれくらい離れているのだろう。同  
じ東京都なのだから、そう無茶苦茶に離れているはずはない。で  
も、もしかしたら、新幹線で名古屋に行くより遠いかもれない。  
十万分の一の地図で見る奥多摩町は広くて、見開き二ページの  
中央に、いびつなポテトチップスのように拡がっていた。

南に奥多摩湖。かつて有料道路だった奥多摩道路が、夜間通行止めの一般道になっているのを初めて知った。

緑地を示す薄いグリーンに塗られた部分の多いその町は、あちこちに鍾乳洞や渓谷の名前が記されている。イワナ、ヤマメ、ワサビといった特産品マークが散らばる間を、リュックを背負ってピッケルを持った人間のマークが連続写真のように続いている。これは登山道の表示だ。

径士郎はこの町のどのへんに住んでいるのだろうか。

「まだ寝ないの？」

不意に声をかけられた。

部屋の入口に、眠そうな目の宗太郎が立っていた。

「あら、寝たんじゃなかったの？」

「トイレ」

いったん寝つくと朝まで決して起きない宗太郎が、どうしたのだろうか。

私はまるでエロ本を読んでいるところを見つけた少年のように、拡げていた地図をそそくさと閉じた。

## CHAPTER

翌朝、宗太郎を学校へ送り出すと、私はすぐにパソコンに電源を入れ、ネットワークのホストコンピュータに接続した。

径士郎へ電子メールを送ったのは昨夜の十二時近く。まだ数時間しか経っていない。まだ返事が届いているとは思えなかった。

しかし、私の予想は快く裏切られた。

「メールが一通届いています」

画面に映し出されたその文字の後を、私は息を呑んで見守った。

〔澤田径士郎 VB23415N〕

題名：やあやあやあ

返事が届くまでの間、君のことをいろいろと想像していました。ホストコンピュータの会員情報に登録されていた、たった一行の情報を、何度も読み返しました。

●里見祥子

住所：東京都町田市

使用機種：アスタシア DT486/6

6

登録名が、僕が知っている里見のままだということとは、まだ独身なのだろうか。でも、君が結婚したという噂を随分前に聞いた記憶がある。今流行り（と言ったら、もしそうだとしたら怒られるな）の旧姓使ってやつだろうか。

登録名はパソコンネットワーク使用料の決済クレジットカードの名義名のはずだから、それも変だな。いや、もしかすると近頃はクレジットカードの名義も旧姓使用ができるのだろうか……。

使用しているパソコンが「アスタシア」ってのも想像力をかきたてた。これって、長野かどっかにある小さな工場が作っているDOS-IVマシンのブランドじゃなかったっけ？　そういう通好みのパソコンを使っているというのは、これはもう初心者ではないな。あるいは身近にパソコンオタクがいて、そいつがアドバイスして買わせたのだろうか、いや、もしかして旦那の使っているマシンでは？　だとすると僕が送った電子メールは……などなど。ちなみに僕は、ワープロでこの通信をやっています。パソコンを買いただけけれど、恥ずかしながら経済的余裕がない。

旧姓での登録や、使用パソコンのブランドからの想像が一段落



すると、今度は地図を持ち出し、僕の家と町田市の中心部の間を定規で測ってみた。

直線距離でちょうど五十キロあった。

でも、人間は鳥ではない。

そこで次に、道路でつないだ場合の積算距離を計算した。

蛇行している分、長くなって、七十キロを少し超えた。

同じ東京都なのに、随分と遠いものだね。

でも、言葉を一つも交わさずに過ごした十六年間を思えば、どうということのない距離のようにも思える。

あ、「でも」が続いてしまった。

へたくそな文を書いているな。(気がついた?)

地図を拡げ、細かく刻まれた区間距離の数字を電卓で足しているうちに、数時間経っていたりする。俺はどうかしているなど反省しながら、仕事に戻る。

仕事といっても、子供たちのテストの答案の採点とか、来年撒くトウモロコシの種をより分けて保存したりという、他愛のないものだ。

!!!!!!!!!!!!!!

実はここまでは、君から返事が来る前に書いていたものだ。

今、返事を受け取りました。

こちらこそどうぞよろしく。

田舎暮らしでぼけ始めている頭に、適度な緊張感のある文章のやりとりはなによりの薬です。嬉しかったので、とりあえずすぐに返信しておきます。

ではでは」

送信時刻を見てみると、なんと私が昨夜遅く送信した、ほんの十五分後だった。

もしかしたら、彼もこの三日間、私の返事を待ちわびて、数時間とあけずにネットワークに接続していたのだろうか。

ふうっと大きいため息をついてから、私はパソコンの通信ソフトに返信を書く画面を呼び出し、返事を書き始めた。

なぜだろう。

推敲を促す回路がショートしたように、今度は一気に書いていた。

「まずは疑問にお答えしますね。

旧姓使用ではなく、離婚したのです。

一年半前に。

子供が一人います。もうすぐ十歳になります。小学校五年生の男の子です。

名前は宗太郎。」

そこまで書いて、「名前は宗太郎」の部分を削除した。

なぜ削除したのか、自分の気持ちに気づいてはいたが、私はそれを突き詰めることなく、返事を書き続けた。

「仕事は翻訳や雑誌のライターなどをして、なんとか親子二人、食べるだけのお金を稼ぎ出しています。

アスタシアは三カ月前に買いました。二台目のパソコンです。以前は98ノートでしたが、いろいろとやっているうちに高性能なパソコンが欲しくなりました。性能のわりに安いこのパソコンは、自分でパソコン雑誌の記事や広告を読んで選択しましたが、最初のひと月は結構大変でした。今は気に入っています。冷却ファンの音がちよつとうるさいのが難点ですが。

確かに、弱小メーカーのDOS-Vマシン（正確には「AT互

換機」です。言葉に厳格なあなたにつられてつい生意気を……お許しください）を使っているおばさんって、少ないでしょうね。はい、私はオタクです。おばさんのオタク。ここで山型アクセンとセミコロンを使った冷や汗苦笑いマークを使いたいところですが、パソ用語も使わないというあなたに嫌われるといけないのでぐっと堪えておきます。

それから、実は私も同じことをしていました。

昨夜遅くあなたに電子メールで返信してから、地図を持ち出して奥多摩町を見ていました。意外と大きな町ですね。

地図で見るとまでは、町田だって同じ東京都の外れだし、少し北上すれば奥多摩に着くような気がしていたのですが、とんでもないということが分かりました。

道路の積算距離は調べませんが、代わりにパソコンソフトで、電車の路線接続を調べてみました（やっぱりオタクですね）町田から奥多摩までですと、横浜線で八王子に。それから中央線の快速に乗って立川に戻り、青梅線に乗り換えて終点が奥多摩、という経路がいちばん早いそうです。パソコンは待ち時間を含めて合計二時間十五分という予測を立てました。あるいは小田急で登戸に出て、南武線で立川に出るという方法。これは二時間二十七分かかるそうです。

いずれにしてもちよつとした旅行ですね。時間的には三百キロ離れた名古屋のほうが近いんです。新横浜から新幹線に乗れば二時間十分、と出ましたから。

あなたが小説で賞を受賞されたということ、今の今まで全然知りませんでした。ごめんなさい。すぐに入手して読みたいと思います。楽しみです。

愛妻と二人で晴耕雨読の生活をしている作家なんて、羨ましい限りです。私にはとてもそんな余裕はありません。

媒体への発表を諦めたなどとおっしゃらず、書き続けてください。少なくとも私はいつまでもあなたの読者でい続けるでしょう。大学の文芸サークルにいたときだって、私はあなたが発表した文章はすべて読みましたし、印刷されているものは今でもとっています。

そう、私はあなたの文章のファンでした。（と言いながら、あなたが受賞したことを知らなかったのだから、間抜けですね）

私のほうは数年前から俳句をかじり始め、今は「潜流」というグループに所属しています。

ご存じかと思いますが、「潜流」は堅苦しい俳句結社などとは違い、パソコンネットやFAX通信を駆使した自由な俳句サークルです。私は持っていないませんが、俳句結社手帳というものに全国約二百五十あまりの結社の一覧が載っていますが、その中で、現代仮名遣いを容認している結社は一割にも満たないようです。潜流はその一割の中でも最も自由な会派でしょう。会員は全国で千人以上いるそうなので、決してマイナーな団体ではありません。現代文芸フォーラムの中の十二番会議室「なかしち倶楽部」の常連のうち、半数以上は潜流の正式会員だと思います。

潜流というのは、目に見える海流の下を流れている、見えない潮の流れのことだそうです。なかなか味のある名称だと思います。多くの人は（会員でさえ）ただ「川柳」の音に適当な字を充てたのだと思っていますようですが、「川柳」と同じ音になったのは偶然だという話を聞いたことがあります。そもそも、「潜流」は「川柳」愛好者の集団ではありませんし。

無駄話を書いてしまいました。

あなたの書く小説も、今はまだ一般の人の目には触れない「潜流」かもしれません。でも、表面に現れている流れよりもずっと力強い、本質的な流れかもしれません。私はむしろ、そうした流

れのほうに心を揺さぶられます。  
力強く流れ続けてください。」

この電子メールへの返事も、半日とかからずに送信されてきた。

〔澤田径士郎 VB23415N〕

題名：決壊

二人で同じことをしていたとは！  
会いましょう。

互いの姿も見えず、声も聞こえない、ただの文字列の送信だけの心の交流で残りの人生を送っていいはずはない。

奥多摩と町田の中間をとって、八王子あたりでどうですか？  
電車でも車でも。

あるいは町田まで出ていってもいいですよ。  
返事、待っています」

## ∟ΠE

八王子という町を訪れたのは、もしかしたらそのときが初めてだったかもしれない。

約束の時間より十五分早く駅に着いた私は、指定された南口に降りる前に、百貨店やスーパーが建ち並ぶ北口に出てみた。

大きなロータリーからまっすぐにメインストリートが伸びている。繁華街はその通りの左側に広がっていた。

八王子がこんなに開けた街だとは、私はついぞ知らなかった。

長崎屋と西武百貨店が並んで建つあたりまで歩くと、私は再び駅に引き返した。

〔北口はごみごみしているので、南口にしましょう。雑居ビルの

地下にある、静かな喫茶店を知っています。名前は『クロムウエル』。そこに一時でどうですか？」

電子メールの中の一節を反復しながら、私は駅への階段を上る。クロムウエルとは驚いた。

初めて「潜流」の存在を発見した人物の名こそ、クロムウエルなのだ。径士郎は知っていてその喫茶店を指定したのだろうか？  
いずれにしてもできすぎている。

百メートル以上はゆうにあるブリッジを渡り、南口に降りると、景色は北口とは打って変わって閑散としたものになった。

空っぽの車輛が並ぶ機関区、運送会社の倉庫、そしてひなびたラブホテル。

十六年ぶりに昔の恋人に再会するには、あまりにも味気ない場所だった。

「喫茶室・クロムウエル」という小さな電飾看板は、間口が三間もない小さな雑居ビルの前に置かれていた。コーヒーマーカー名が入った、よくある看板だ。

地下への狭い階段を下りていくと、コンクリート打ちっ放しの壁面に取りつてつけたような木製のドアがあり、DIYショップでよく売っている楕円形の木製プレートの上に、真鍮製の切り抜き文字で「open」とあった。

ドアを引くと、耳のすぐ上でスプリングのついたベルがカランカランとけたたましい音を立てた。

予期した「いらっしやいませ」という声はどこからも聞こえなかった。

店内は細長く、カウンター席の他には、四人掛けの椅子席がカウンターと並行に一直線、四組並んでいるだけだった。

カウンターの造りは一昔前に流行したカフェバー風。壁のクロスはところどころ汚れが目立ち、テーブル席のほうはまるでどこ

かのゲーム喫茶から引き取ってきたような、ビニールレザー張りのソファとガラステーブルだ。入口の木製ドアとも、スチールパイプのラインを生かしたカウンター席とも釣り合いがとれない。

客は誰もいなかった。

平日の午後一時半。場所も場所だし、仕方がないかもしれないが、成り立っているのが不思議な店だ。

もしもこの店がつぶれていたりしたら、私は殺風景な八王子駅の裏手で、落ちつかない視線をあちこちに送りながら佇んでいなければならなかったのだ。径士郎は一体どういうつもりでこんな場所をわざわざ指定したのだろう。繁華街では、私と会っているところを誰か知っている人に目撃される確率が高いと思ったのだろうか？

入口のそばで立ったまま、一瞬のうちにそんなことを思いめぐらせていると、奥から太った初老の男が現れた。

「いらっしやい」

ジーンズのオーバーオール。白髪混じりの髭。どうやらこの店のオーナーらしい。

水が流れる音がしている。どうやらトイレに入っていたらしい。私はためらいながらも、入口に近いテーブル席に腰を下ろし、ミルクティーを頼んだ。

腕時計を見ると一時半ちょうど。約束の時間だった。

待たされるのだろうかという不安がよぎったとき、ドアベルが再びけたたましく鳴った。怖いものを見る思いで、ドアのほう向く。

え？

そこには私が知っているままの径士郎が立っていた。

大学時代と同じヘアスタイル、ファッション、そして体型……そんなことがあるだろうか？

私は無意識のうちに、径士郎がどんなに変わっていても驚くまいと身構えていた。

腹が出ていようが、頭が禿げていようが、いや、顔つきそのものがすっかり変わっていることを想定して、「変わってしまった」径士郎をにこやかに受け入れる準備をしていたのだった。

それが、あまりにも変わっていない彼が目の前に出現し、逆にどう対処していいのか分からなくなってしまった。

「やあ。久しぶり」

径士郎は片手を軽くあげてそう言うと、私の前の席に腰を下ろした。

「変わっていないなあ」

先にそう言われ、私は一瞬言葉を失った。

「あなたこそ。びっくりしたわ。あまりにも昔のまままで」

「馬鹿言うなよ。十六年経っているんだぜ。体力は落ちるし、気力は萎えるし」

「そんなふうには見えないわ。よく見ると、少し痩せたかもしれないけれど」

「体重は少し増えたよ。痩せて見るとしたら、皺が増えたのさ。肌に艶がなくなったっていうか」

「それ、私のこと？」

「え？ いや……」

径士郎は上目遣いで私の顔を見ながら、苦笑した。

そうではないと言わないところが正直だ。彼は昔から、こういうことでは嘘やお世辞を言えない人だった。それも変わっていないと思うと、なんだかおかしくなった。

数年前に流行ったペイズリー模様のコットンシャツにブルージーンズ。襟元から色褪せたTシャツが覗いている。

こんなラフな格好の中年男性を話相手として目の前にするのは



久しぶりだった。

別れた夫は、休みの日にも「カジュアルファッション」という名のお洒落をしていた。Tシャツ一枚、トレーナー一枚も、高級ブティックで買ってくるような人だった。

今、径士郎の目には、それなりにお洒落をしてきた私の姿はどう映っているのだろうか？

皺を隠そうと念入りに塗り付けたファンデーションは、早くも細かい粉を吹いているかもしれない。口の悪い彼が、昔たった一回だけ誉めてくれたボリュームのあった長い髪は、肩に届くこともない長さに切りそろえられ、潤いを失っている。

女は損だ。

つくづくそう思った。

彼に会うまでは、私は自分の容姿が学生時代に比べてそれほど変わっていないことに自信を持っていた。身体の線だって、大きく崩れてはいないと思う。

頭が薄くなり、腹の出た彼の前で、そのことを無言のうちに誇示できるのではないかとさえ思っていた。

それがどうだ。こんなに自信を持ってないまま、おどおどと向かい合わなければならぬとは……。

「離婚したって？」

おっと、いきなりそうくるの？

私は一呼吸も置かずに、笑顔で答えた。

「ええ」

「小学生の子供を抱えての離婚か。大変だな。子供なんか作らなければよかったって思わなかった？」

「そんなふうには思わないけれど。あなたはなぜ子供を作らなかったの？」

「自分のことで精一杯だったからさ。自分の夢が実現していない

のに、子供だなんて」

径士郎らしい答えだ。

「それもいいかもしれないわね。子供の分も奥さんとの愛情を深められて、幸せかもしれない」

「そんなんじゃないさ。余裕がないだけ。金も、心も。ただ、それだけさ」

径士郎は少しすねたように口元を歪めて言った。

太ったマスターが、紅茶を運んできた。

紅茶にしては異様に赤い液体が、肉厚の、巨大なカップに入っていた。よほど、「これは紅茶ですか？」と訊き返そうと思ったが、確かに紅茶の香りが漂ってきたので思いとどまった。

径士郎は「僕にも同じものを」と言った。

そのフリーズを、以前にも何度か聞いた気がする。

「僕にも同じものを」……それは径士郎の口癖のひとつだったのだろうか。

完全に思い出すまでには、まだ時間がかかる。十六年というのはそういう長さなのだと思えて知った。

「今日は、なんて言っ出てきたの？」

私は大きな、肉厚のティーカップを見下ろしながら訊いた。

「別に」

「黙って出てきたの？」

「黙ってってこともないけれど。まあ、デートだとは言わなかったかな」

「いろいろと気を遣わなければならなくなったのね」

「大したことじゃないさ。その分、大人になっているはずだしね」  
「どうということ？」

「いろいろな人に、同時に優しくなれるってこと。嘘をつくこと、何も言わないことも含めてね」

彼の分の紅茶が運ばれてきた。やはり大きなカップだったが、形や縁の模様が違っていた。「揃える」ということにまったくこだわっていないらしい。変わった店だ。

クロムウエルでは、結局紅茶一杯で三時間近く話し込んだ。「まだ時間があるなら、そのへんドライブでもする？ 車で来ているんだけど、そろそろ駐車違反が気になるし」

断って別れを告げるべきだったのかもしれない。でも、別れがたかった。

今日会ったのは彼の気紛れで、もしかしたら再び五年、十年と会えないかもしれない。次に会うとき、私はもう、色気のかけらも残していない老婆になっていて、罪のない思い出話をしているだけかもしれない。

彼は伝票を持って立ち上がり、二人分の紅茶代を払った。

二人が話し込んでいる三時間近くの間、店を訪れた客はほんの数人だった。なぜやっていけるのか、どう考えても不思議な店だ。店を出ると、彼は細い路地に入っていた。まっすぐ歩くその先には、ホテルの看板が見えている。

私は慌てながらも、彼の後ろを歩いた。

ホテルを通り過ぎ、数メートル行ったところに、ダークグリーン  
の旧型ジムニーが停まっていた。今では滅多に見ることのない、  
まだ排気量が三六〇ccだった頃のジムニーだ。「ボロでお恥ず  
かしいんだけど、まだ走るもんだから、なかなか手放せない」  
そう言うと、径士郎は助手席側に回り、私のために恭しくドア  
を開けてくれた。

シートには赤いクッションが置かれていた。それを見て、少し  
躊躇った。

ここに、奥さんがいつも乗っているのだ。

「町田まで送っていくよ」

「悪いわ。あなたが帰るのが大変になる」

「十六年ぶりのデートだぜ。そんな尺度じゃ計れないだろう？俺はまだ別れがたい。俺は車だからいいけれど、君は電車だし、家には子供が待っているんだから……まあ、いいじゃないか、なんでも」

そう。なんでもいい。気分の任せるまま、もう少し時間を共有していたい。

私は車高の高いフロアに脚をかけると、狭い助手席に滑り込んだ。

本当に狭い車だった。

彼がドアを閉めると、私の左手はドアに押しつけられたままになった。

フロント側を回って彼が運転席に乗り込んだ。

キーをひねると、頼りないセルモーターの音に続いて、小さなエンジンが主人の号令に応える忠実な老犬のように回りだした。

自転車に乗った茶色い髪の青年が、珍しいものを見るような目を向けながら走り去っていった。

「こんな車でも、車がある生活ってのは贅沢だよな。学生のとくにこいつがあれば、もっと楽しいデートができただろうに」

「今からだって十分に楽しめるわ」

そう言った後で、なんとということを言っているのだろうと自分でも呆れた。

彼は返事をせずに、車をスタートさせた。

国道十六号を南下したらしいことは大体分かったが、そこから先はよく分からなかった。

気がつくくと、車は墓地と高速バイパスを見おろせる小高い丘の空き地に停まっていた。

ごろごろした石がころがり、その隙間を縫うように雑草が生えている。普通の乗用車なら乗り入れられないような場所だった。

無言で降りる彼の後を、私も黙って追った。

八王子市と町田市の境界付近だろうか。このへんはまだまだ緑が残っている。空き地の奥には草原が拡がり、細かな白い花をつけた野草が密生している。

空が低く、暗い。風も急に強くなってきたようだ。

日が短くなってきたとはいえ、まだ日が暮れる時刻ではない。夕立が来るのだろうか。

空を見上げる私の前で、彼が背を向けたままぽつりと言った。

「書きたいんだ」

「え？」

言葉が聞き取れなかったわけではない。一瞬、意味が分からなかったのだ。

「このままだとさ、書かないまま、平穩に歳をとっていくと思うんだ。」

かみさんは、書くことで苦しむ俺を見ているくらいなら、欲張らずにつましい生活が続けていく幸せのほうがいいって」

「そう言うの？」

「あからさまには言わない。でも、無言でそう訴えているのが分かるんだ。家庭菜園で野菜を作り、近所の子供たちに勉強を教えてささやかな報酬を得て、自然に包まれて穏やかに歳をとっていく。そういう人生をおれと一緒に送りたいのさ」

私は彼の奥さんの姿を想像した。

質素だがセンスのいい服を着て、化粧つけはないが表情は若く、畑仕事で陽に焼け、脂つけのない髪を後ろで無造作に留めている。

勝手な想像の産物である彼の奥さんが、私に微笑みかけた。

嫌みのない、誰からも好かれる笑顔……。

「あなたは作家だわ」

私は一言そう言った。

「書くだけだったら、作家とは言わない」

彼が答えた。

「認められないまま書き続けられるほど、俺はお人好しじゃないし、聖人でもない。やっぱり、数の追認がほしいんだ」

「数の追認？」

「平たく言えば、売れることへの欲求。生きているうちに、認められたい。生臭い欲望だとは分かっているけれどね」

「当然の欲求だわ。なにも恥じることはないわ」

私はそう言うと、彼の右手を取った。

その手に、大粒の雨が落ちてきた。

「降ってきたわ。車に戻りましょう」

私は彼の手を引くようにして、車に戻った。

彼は無言だった。まるで母親に叱られた後の少年のようだ。

雨はすぐに土砂降りになり、雷鳴が轟いた。

古いジムニーの屋根は、トタンの波板のように激しく雨音を響かせた。

フロントガラスは流れる雨水でたちまち曇り、私たちは鉄板とガラスで仕切られた狭い空間に完全に閉じこめられた。

「なれることなら、あなたの覚醒剤になりたいわ」

激しい雨の音が、私に勇気を与えたのだろうか。小さな声で、そう言ってみた。

小さくとも、彼の耳元には確かに届くだけの意志を込めて。

彼は黙って目を閉じていた。

ついさっきまでの雄弁さが嘘のようだった。

嵐は間もなく去った。

彼は無言のまま、再び車をスタートさせた。

私は揺れる助手席で、コンパクトの小さな鏡を覗いて、自分の顔を確かめた。

目が少し赤かったが、化粧は恐れていたほどには崩れていなかった。

「再会の口づけ永し野分中」

「十戒の一戒解かる花野かな」

／＼

何かが弾けた。

私の中で、今までくすぶっていたものがパチンと音を立てて弾けた。

その日から、私は毎日、パソコンの画面に向かって電子メールを書き続けた。

私は彼の住所も電話番号も知らない。訊こうと思いつながら、躊躇っていた。

再会から五日後、私は思い立って、パソコンの通信ソフトをNTTの番号検索センターに接続した。オペレーターと直接言葉を交わすことなく、料金も安く電話番号を検索できるので、ときどき利用するのだ。

都道府県：トウキョウト、市・区：オクタママチ……。データをカタカナで入力していくと、ホストコンピュータはたちどころに彼の電話番号と住所を調べ出してくれた。

政府の秘密文書を盗み出すよりも大きな犯罪を犯してしまった気がした。

そのとき、玄関で音がして、郵便物がコンクリートのたたきに落ちた。

クレジット会社のダイレクトメールと一緒に、茶封筒が落ちていた。

差出人には彼の名前があった。住所もきちんと書かれてあった。私は思わず苦笑した。

封筒の中からは、むき出しのフロッピーディスクが一枚出てきた。

パソコンに挿入し、すぐに内容を読んだ。「前略、

リクエストにお答えして、未発表の作品を送ります。パソコンだと大量の文書もデータ圧縮してバイナリの電子メールで送ることもできるようですが、なにせワープロ通信の哀しさ。フロッピーで送ります。もつとも、これだけの量だと、圧縮して送っても相当時間がかかって、電話代や通信利用料が高くつくでしょうね。

純文学と呼ばれる分野の場合、中途半端に賞を受賞して、その後売れない日々が続くと、再チャレンジが難しくなります。「売れなかった」という事実だけが認知されてしまうんですね。編集部に原稿を持ち込みたい旨を電話すると、「うちでは持ち込みは受け付けていません。新人賞に応募してください」なんて言われる。そこで、心機一転、新人賞に応募すると、今度は「過去の受賞者は一応新人とは言えないので、申し訳ないのですが作品は受理できません」などと断られる。これではまったくどうしていいのか分かりません。名前を変えて応募してみようかとも思いましたが、僕の場合、本名で一度デビューしているものだから、どうしても分かっちゃいます。

そんなわけで、どんどん未発表作品が溜まっていきます。原稿用紙ではなく、フロッピーディスクの中に書き込まれているので、僕が死んだら、誰も気がつかないでしょう……」



題名：もつたいない

昨日は本当にごめんなさい。せつかく会ってくださるというのに、子供が熱を出してしまつて会えなくなるなんて。

前の夜からなんだか寝ぐずつていて、嫌な予感がしていたのですが、朝、布団の中で真つ赤な顔をしている子供を見たときには本当にショックでした。子供なりに、何かを察知しているのでしょうか？

泣く泣くあなたとのデートを諦め、「今日は家にいるから」と言ったら、午後にはけろつとしてテレビゲームを始めている始末です。こんなことなら放つておいて出かけるのだったと後悔しましたが、やはり熱を出して寝込んでいる子供を一人家に残してデートに出かけることはできませんよね。

子供の看病をしながら、あなたからフロッピーディスクで送つていただいた小説、すべて読みました。

感想はいろいろとあるのですが、一言で言えば「もつたいない」ということに尽きます。

誰の言葉かは知りませんが、「本当の傑作はひっそりと机の中に眠っているものだ」という言葉を聞いたことがあります。あなたの作品群に触れて、まさに至言だと思ひ知らされました。

これらが単行本としてはおろか、小説雑誌にさえ収録されないままでいるなんて、世の損失というものです。私が何人めの読者なのかは知りませんが、なんとか世に出せないものかと考え込んでしまいました。

私が文芸関係の編集者、いえ、そこまでズバリでなくとも、出版関係に知人でもいれば……と、歯がゆい思いです。

それにしても、あなたに受賞歴があることを理由に新人賞の応募作品として受理しなかったという出版社の考えは理解に苦しみます。応募規定の「新人に限る」という項目、確かにあなたが言

うとおおり、あまりにも曖昧ですね。特にエンターテインメント以外の、いわゆる「純文学」（この言葉の定義は未だによく分かりませんが）作品の場合、原稿を持ち込もうとしてもなかなかうまくいかないのでしょうし、困ったことだと思えます。

次はいつ会えるのでしょうか。  
こちらの都合で当日キャンセルをしておきながら凶々しいのですが、できる限り早く会いたいです。

猛暑の後を受けて、半袖一枚で過ごすことにすっかり慣れてしまいました。今朝は急に冷えた気がします。暑かった夏の後の秋は、体に変調をきたしやすいとか。どうぞご自愛ください。

人恋えば目覚めの早し百舌の声

祥子

再会してから一週間後、二度目のデートは宗太郎の突然の発熱で流れてしまった。

万一都合が悪くなるといけないから、朝の八時にパソコン通信で最終確認を取り合おうと提案したのは彼のほうだった。

まさか私のほうが都合が悪くなるなどは、そのときは思ってもいなかった。

いつもよりも早く目が覚め、熱いシャワーを十分に浴びて、濡れた髪にタオルを巻いて鏡台のある寝室に戻る途中、宗太郎の部屋から荒い寝息が聞こえてきた。

ドアから差し込んだ明かりの中で真っ赤な顔を見たとき、身体中から力が抜けていく思いがした。

体温計は三八度四歩をさした。

腫れぼったい目で、「どこか出かけるの？」と訊いてきた宗太郎の顔が憎たらしかった。

径士郎から送られてきたフロッピーディスクには、短編、長編織りまぜて、合計七百キロバイト以上の小説原稿が収められていた。二バイトが一文字に相当するから、三十五万字以上。単純に四百字で割れば原稿用紙九百枚近くということになるが、改行後の空白などはバイト数に数えられないので、実際には千枚をはるかに超える量だ。

パソコンの画面で千枚を超える量の小説作品を横書き表示で読むというのは、結構疲れる。しかし、私は引き込まれ、あつという間に読み終えた。

電子メールの最後に正調の句を添える自分の素直さにも驚いた。詠んだ後、本棚の隅に追いやられていた俳句歳時記を引っ張り出して、かつて勉強した頃の記憶が正しいことを確認する。

まるで、髪を染め、穴の空いたジーンズを穿いて町を闊歩していた少女が、就職活動のためにスーツに着替えたような気分だった。

何かが少しずつ狂ってきている。しかし、私はその変調を楽しんでいた。

〔澤田径士郎 VB23415N〕

題名：もし君さえよければ……

君に再会できて本当によかったと思っています。なによりも、まず書き続ける勇気が持てた。

「覚醒剤」とはよく言ったものだと感心。妻は確かに人格者だし、その穏やかな精神に触れて救われることがたびたびあります。でも、創作意欲や何かを書かなければいけない衝動は、穏やかな精神からはあまり生まれてこない気がします。

勝手な言い分だけれど、僕は不安定で苛立っている自分のほう

が好きです。そうした一種病的な精神状態で書き続けている自分が好きです。今の僕は、妻という精神安定剤を常用しすぎて、中毒になっっているのかもしれない。普通に見れば幸福で安定した生活も、僕の個性からすれば「何も生み出さない」不幸な状態なのです。

実は、二年間の年月をかけて推敲を重ねた自信作がひとつあります。まだ未完で、先日送ったフロッピーには入れませんでした。これがある文学賞へ応募してみようと思っっています。以前、僕が佳作を受賞した文学賞です。数年前、再応募したとき、暫くして電話で「過去の受賞者は、佳作といえども新人という応募規定に抵触するので受理できない」と断ってきました。再挑戦はできないというわけです。

しかし、僕はこの賞に未練があります。文学の衰退が言われる中、今でも高い評価と権威を保っているという意味で、この賞はやはり図抜けています。言い換えれば、他の賞にはあまり興味はないのです。

そこで相談です。

同じことを繰り返しても仕方ありません。今度はペンネームで応募しますが、本名を書かなければならないので、結局は以前の佳作受賞者だと知られてしまいます。本名と連絡先に、君の名前と住所を貸してもらえませんか？

迷惑なことは重々承知です。万一受賞が決定したら、その時点で僕が事情を説明して名乗りを上げます。受賞決定後にまさか取り消しということにはならないでしょう。出版社側だって困るはずだから。

その後はペンネームだけが認知され、誰も応募者の本名のことなど覚えてはいません。なんならば、僕が勝手に君の名前を利用したということにしてもいい。

駄目でしょうか？

明日、八王子に出る用事があります。用事は午後の早いうちに終わります。もし時間があれば、その後、会いませんか？

朝、出かける前にパソコン通信で可否を確かめますので、ご返事を。

では。

恋ふる胸はじけて覚むる朝寒し

径士郎」

返句を、くすぐったい気持ちで何度も読み返した。

語感随分と収まりが悪い。「ふる」「むる」「さむる」

「さむし」で韻を踏んでいるつもりかもしれないが、重なり方が汚い気がする。

名前を貸してほしいという申し出には、ただただ当惑するばかりだった。

文学賞は他にもあるはずだし、このことに関しては丁重に断ろう。

それよりも、明日会えるということ、私はもう浮き足立ってしまっていた。

△∥△

「ただ面白いだけじゃない、あるいは勝手に深刻ぶっている独白でもない。言ってみれば、面白い純文学ってのをやりたいんだ。わざわざ単行本にして世に出すからには、それなりに評価される文学じゃなきゃ駄目だとは思うけれど、取っつきにくいだけの独りよがりはもうごめんだよ……」

彼の熱弁は続いていた。

六時半を回ると、喫茶店「クロムウエル」は店内の照明を落として、バーに変身した。木製のドアを背中を押しながら、背の高い三十代くらいの男性が一人、店の電飾看板を抱えて入ってきた。閉店かとも思ったがそうではないらしく、男は看板を店の奥にしまい込むと、代わりに別の電飾看板を抱えて外に出ていった。代わりの看板には「パブスナック・クロムウエル」と書かれてあった。

男は再びドアを入ってくると、奥でバーテンダーの服装に着替えてカウンターの中に立った。同時にカウンターの両端にあるラントンに赤い灯がともる。放電ビームによる擬似的な炎の演出が、これほど似合わない店も珍しい。

店のオーナーらしき太った中年男性は、カウンターの外に出るとテーブルのメニューを取り替えて回った。

私たちのテーブルの上には底に一センチほど冷たいコーヒーを残したカップが置かれている。そのカップを下げることもせず、太った男性は茶色のビニールレザーの表紙のメニューを、何も言わずにグレーのものに交換した。

私はそのメニューを開いた。

アルコール飲料やおつまみ類中心の内容だった。カクテルも数種類記されている。

「……結局、世の中がどんどん下品になっているから……」  
話し続ける彼の目が、開いたメニューのページに向いた。

「あの……何か頼む？」

話し続ける彼を遮る形で、私は訊いた。

「うん？」

コーヒーとサンドイッチだけで、もう四時間も粘っていた。

入れ替わり立ち替わりしていた回りの客たちも、店がバーへと変わるのを合図にしたかのように消えてしまい、店内に残ってい

る客は私たちだけになっていた。

「もう、こんな時間か。僕は構わないんだけど、君は子供が腹減らして待っているんだらう？」

「一応遅くなるかもしれないからって言ってあるけれど」

「夕飯は？」

「私がないときは一人でちゃんどできるように教育してあるから。冷凍食品を電子レンジで調理したり、近所のコンビニでお弁当買ってきたり……あら、恥だわね、こんな話。ひどい母親だと思いでしよう」

「逆よりはいいと思うけれどね」

「逆って？」

「子供のための食事作りや塾への送り迎えで一日を潰しているような母親よりはいいってことさ。小学校に上がるようになったら、子供が能力的にできることを、親が代わってやることはない。アジアやアフリカのほとんどの地域では、子供は大切な労働力だよ。子供がほとんど家事労働をしないという点で、日本は極めて特殊な国なんじゃないかな」

私はどう答えていいのか分からなかった。

そういう問題ではない気がした。母親が外で働いていて、やむなく夕飯までに帰れないのではない。他人の夫と、薄暗い地下の店で密会しているのだ。子供が家事労働をするしないという次元の話ではないだろう。

「一杯だけ飲んで帰るわ」

「ここで？」

「ええ。こんなに長い間場所を提供してもらって、サンドイッチとコーヒーだけでは申し訳ないもの」

径士郎はカウンターのほうを振り向き、手を挙げてマスターを呼んだ。

径士郎はバーボンの水割りを、私はジンライムを注文した。つきだしは出てこなかった。

私たちはつまみなしで、グラスを傾けた。

「沁みるなあ」

彼はため息と共に、そう呟いた。

「お酒が？」

「何もかも、すべてがさ。君は最高の覚醒剤だ」

「誉められているの？」

「多分ね」

「もし、私があなたと結婚していたら、今頃は逆だったかもしれない。あなたは私に飽きて、覚醒剤を求めて外へ出ていったのかもしれないわ」

私のその言葉に、彼はすぐには答えなかった。

グラスの中の氷を揺らせながら、私の胸元を見つめていた。

「ごめん。……でも私、それよりは今のほうがいいわ。それであなかがいい作品が書けるなら、私を利用してくれていいわ」

「利用する……か……」

彼はそう言うと、残っていたウイスキーを一気に飲み干した。

私のグラスには、もう氷しか残っていなかった。いつの間に飲み干していたのだろう。

「行くわ。これ以上、不良母親をするのはちよつと気が引けるから」

私はテーブルの上の伝票を取った。

取り返そうとする彼に「この前、出してもらったから」と言うのと、「じゃあ」と、あっさり手を引つ込めた。

コーヒー二杯とサンドイッチとウイスキーの水割りにジンライム。計二千三百円の伝票だった。

外に出ると、風が予想以上に冷たかった。あたりはもうすつか



り暗い。

右に戻ると八王子駅の南口、左に少し行って路地に入ればひなびた二階建てのラブホテル。

彼は左を向いていた。

「今日も車？」

と、私は訊いた。

「うん。この前のところに停めてある」

と彼。

「じゃあ、ここで。今日はどうもありがとう」

「あのさ……」

彼が口ごもった。

「何？」

「不良母親ついでに、もう一、二時間、一緒にいてくれないか。

このままじゃ、切なくてさ」

彼の背後には、路地裏のホテルの電飾看板が見えていた。

昼間は目立たないが、夜になると怖いほど強い光を放っている。

「私も切ないけれど、今日は帰るわ。ごめんなさい」

私は右手を軽く挙げると、駅のほうへ歩き出した。

彼は数秒躊躇していたが、すぐに早足で追ってきた。

振り向いた私の目に、彼の少し充血した眼差しが飛び込んできた。

「ここで別れま……」

「駄目か？」

今日、初めて見せた真剣な表情だった。

「ごめんなさい。今日はここで別れましょう」

私は彼の右手を軽く握って言った。

作業服を着た若い男が二人、好奇の視線を投げかけながら通り過ぎていった。

「分かった」

彼はそう言うのと、口をへの字に結んで、視線を外した。

私は速くなる鼓動を後追いするように、駅に向かって早足で歩き始めた。

彼はもう追ってはこなかった。

。

家についたときは八時を過ぎていた。

「お帰りなさい」

玄関に迎えに出た宗太郎の肩越しに、テーブルの上に置かれたカップラーメンの食べ殻が見えた。

「ごめんね。遅くなっちゃった。ラーメンしか食べていないの？」

「うん。ママは？」

「ママはまだ……」

食事をしていないと言いかけて、さつき吞んだジンライムの味が胃液と共に酸っぱくこみ上げてきた。

私は急いで服を着替えると台所に立った。

冷蔵庫を覗いても、大したものが入っていないなかった。

いつもは好奇心の塊の宗太郎が、なぜかどこへ行っていたのかと訊いてこない。

私は切なく、やるせなく、情けない思いを噛みしめながら、プレーンオムレツを焼いた。

卵の匂いが鼻腔を刺激し、軽い吐き気を覚えた。

空腹感はない。朝からサンドイッチを数切れ食べただけなのに。

「家族の数だけ鍋はおいしい」

突然そんなコピーが頭の中に蘇った。

その日から三日間、彼からの電子メールがなかった。私からは二通の電子メールを送っていた。

誘いを断った私に腹を立てたのだろうか？

このまままた、何年も何十年も、いや、死ぬまで音信不通になるのだろうか？

私はパソコンのハードディスクの中に残された小さなテキストファイルを探し出して、じっと見つめていた。

そこにはNTTの電話番号検索案内で調べ出した彼の住所と電話番号が記されている。

この番号にかければ、恐らく彼のそばにある電話機のベルが鳴るのだ。

受話器を取り上げるのは彼だろうか、それとも……。

電話番号を映し出していた画面が壊れ始めた。

画面の中に四角い切り込みが入り、その枠の中が鏡を向かい合わせたときのように無数のずれた映像を映し出す。たちまち画面の文字は読めなくなる。

スクリーンセーバーが起動したのだ。

数日前から、スクリーンセーバーを「お散歩ブタ君」からの、「鏡地獄」というのに替えていた。今の私の気分微妙にマッチしている気がしたからだ。

画面は次々に切り刻まれ、もうまったく元の画面の面影を留めていない。まるで、パソコンが「馬鹿なことを考えるんじゃない」と私を諭しているようだ。

キーボードの脇のマウスに軽く触れる。

入力信号を感じたパソコンは、何事もなかったかのように乱れた画面を元に戻した。

私はふと、身体中に輸液パイプを取り付けられた末期患者の姿を想像した。

私と径士郎の間のラインは、電話線とキーボードでつながっているだけなのか？

一度しまった地図を引っぱり出して、奥多摩町のページを拡げた。

今度は彼の家の正確な住所が分かっている。道路マップだといふのに、等高線ばかりが目立つ寂しい山の中に、彼の家はある。このへんではないかと思う場所に、鉛筆で小さく丸印をつけた。その丸印から、2Bの鉛筆でゆっくりと南東方向に幹線道路の上をなぞり始める。

奥多摩町役場、鳩ノ巣溪谷、御岳溪谷、吉野梅郷、横田米軍基地……町田にたどり着くまで、ページを三回めくらなければならなかった。彼が八王子まで車で出てくるのも結構な道のりなのだということを改めて知る。

このルートを車で逆走すれば、彼が住む家にたどり着く。電話線ではなく、土の上の本物の道をたどって。

そのままどれだけ地図を眺めていただろう。パソコンの画面は再び「鏡地獄」に陥っていた。

窓の外は、しと降る雨。

寒い。

つい先日まで半袖のシャツで過ごしていたのに、今朝は長袖の上にカーデイガンを羽織っている。

行ってみようか……。

住所を頼りに家を見つけたら、外からたたずまいを見届けてそのまま帰ってくる。それだけだ。決して見つからないように、迷惑をかけないように……。

でも、地図を見る限り相当な田舎だ。彼の家は一本道の突き当たりで、その道を入っただけいけばいやが上にも目立ってしまうかもしれない。もしかしたら、畑仕事をしている彼の奥さんと鉢合わ

せするかもしれない。……いや、今日は雨だ。そんな可能性は……。

電話が鳴った。

聞き慣れたベルの音なのに、なぜか心臓が一瞬飛び出るかと思うほど驚いた。

「はい」

〈あ、もしもし。僕です〉

声を聞いて、緊張の弛緩と収斂がいつぺんに襲ってきたような不思議な感覚を覚えた。〈ごめん、突然電話なんかして。通信モテムが壊れちゃってね、電子メールが出せなかったんだ。君が何か書き送ってくれていても読めないし、仕方なく、電話することにした〉

「ああ……」

私は思わず、自分でも呆れるくらい奇妙な呻き声を上げた。

〈え？ どうしたの？ 今、何かまずい？〉

「ううん、違うの。ごめんなさい。ずっと悩んでいたものだから。この前、すつきりしない別れ方したから、怒っているのかわかって思ってた」

〈怒る？ まさか。切なかつたことは確かだけれど。この歳になつて、またこういう気分を味わうとは、我ながらびっくりしているよ〉

「よかつた。もしかしたら、このまままたずっと音信不通になっちゃうんじゃないかって思ったわ」

〈それはない〉

「今、話していて大丈夫？」

〈あと三十円分ね〉

「公衆電話なの？」

〈うん。実は……町田駅からかけているんだ〉

「ええっ？」

「ごめん。迷惑だよな、こういうのって。別に気にしないでいいんだ。君が住む町の様子がふと見てみたくなっただけだから」

「町田駅のどこ？　すぐに行くわ」

私は彼の正確な居場所を把握すると、そこから近い喫茶店を指定して電話を切った。

径士郎がすぐそばまで来ている。そう思うだけで、口笛を吹きたくなるような気分になった。

。

小田急を使うことが圧倒的に多い私は、JRの町田駅の南側というのをそれまで気にしたことはなかった。しかし、面白いことに町田もまた、JRの線路を挟んで北と南に分けると、八王子と同じように別世界になっている。

駅の改札口の前を通り抜ける自由通路を南の壁まで進むと、左側に降りていく狭いエスカレーターがある。ここを下ると、町田のもう一つの顔が広がる。

大判焼の店を横目で見ながらさらに南側に行くと、ラブホテル街になっている。人通りも少なく、ここをカップルで歩くとかなり目立つ。

径士郎は初めての土地のはずなのに絶えず私の一歩前を歩き、周囲のホテルのたたずまいを素早く見定めると、二番目に近いホテルの入口をすつと潜った。

私が声をかける間もなかった。

私は路地の真ん中に一人で取り残された格好になった。

予備校生風の若いカップルが、何かをひそひそと話しながら足早に追い越していった。

その二人が角を曲がるのを見届けてから、私は意を決してホテ

ルの門を潜った。

塀の陰で、径士郎がポケットに両手を突っ込んで立っていた。私が入ってきたのを見ると、背中に軽く手をあて、フロントへと押し出すように導く。

濃いグリーン絨毯を敷き詰めたフロントロビーには、部屋の内部写真をパネルにしたものがあつた。ランプが消えている部屋は使用中らしい。

径士郎は勝手知った様子でパネルの前に立つと、明かりのついた部屋のボタンを押した。

「いらつしやいませ」

背後から女性の声が出た。

映画館の入場券販売窓口のような小さな窓から、革張りのトレーに載せたキーが差し出された。声の主の顔は見えない。

「五時までフリータイムでございます。ごゆっくりどうぞ」

径士郎は返事をせず、差し出されたキーを受け取ると、毎日通っているオフィスビルのように、迷いもせず奥のエレベーターの前に進んだ。

私は黙って後を追うしかなかった。

エレベーターの中で二人だけになったとき、ようやく径士郎が口を開いた。

「こういうところに来るのも十六年ぶりかな」

「私とは……という意味？」

「そう」

径士郎は悪びれずに答えた。

「私は本当に十六年ぶりだわ」

「そう？」

エレベーターのドアが開く。

廊下の壁はところどころに染みがあり、建物の古さを窺わせた。

渡されたキーの番号が記されたドアを開けると、ホテル特有の匂いが漂ってきた。

洗剤と消毒液と様々な人間の体臭を混ぜたような匂い。思っていたよりずっと狭い部屋だった。

ダブルベッドが置かれていることを除けば、ごく普通のビジネスホテルとあまり変わらない。学生時代に径士郎と入ったラブホテルは、隠微な匂いを漂わせる装飾過多の和室だったり、円形のベッドが電気仕掛けで動いたりしたものだが、そういうのは最近では流行らないのだろう。

部屋の中を見回していると、ふいに背後から抱きしめられた。力が一瞬緩んだところで、向き直り、改めて抱かれる。

かつての感覚が蘇る。そう、これが径士郎の抱き方だった。かすかな体臭も同じだ。

でも、私の身体はあるときとは違っている。

子供を産み、肌の張りは失われ……。

それを確かめられることが怖くなった。

でも、もう拒むことはできない。

もう、逃げることはできない。

「その指がまた髪に触れるまでの十六年」

「深みより湧きいでしもの髪も泣く」

## ∟∟∟

下馬評を覆してジャイアンツがライオンズを下した日本リーグが終わると、秋は加速度をつけたかのように進み、年の瀬まではあつと言う間だった。

私と径士郎は年が変わるまでにさらに四回のデートを重ねた。電子メールのやりとりは、二日と空けずに続いていた。



〔書簡集だったら、相当なページ数のものが作れるね〕

そんなジョークが出るくらい、時には最大制限の三百行では収まらないような長編のメールをやりとりすることもあった。

〔書いていますか?〕

〔少しずつね。君のおかげで、また書く気力が湧いてきたよ〕

〔よかったわ。いつまで覚醒剤効果が続くのか分からないけれど……〕

時折彼は、作品の一部分や、アイデアメモのようなものも送信してきた。

朝鮮人の天才マラソンランナーと盲目の日本人少女のラブストーリー、耳の聞こえない作曲家が名曲を生み出すコンピューターソフトを作る話、小さなやくざ組織の親分が、不思議な美少女に感化されて環境保護運動家に転身する話……。

私はそれらのメモやアイデアに、できる限りの感想と激励を返した。

〔どんな作品に仕上がるのか、とても楽しみです〕

毎回こう言っているのでは能がないので、激励の仕方も少しずつ変えたり、それなりに気を遣った。

自分の存在が、彼の創作活動に対して多少の促進作用を及ぼしているかもしれないと思うと、充実感とともに、自分に対する小さな疑問をも感じた。

私は他人の創作活動の促進剤としての人生だけに満足するつもりなのだろうか。

彼に刺激を与えるだけでなく、自分でももっと俳句創作に真剣に取り組もうとも思った。

しかし、定型に縛られた俳句に対しての想いはますます複雑になっていった。定型の落ちつきを愛でる余裕も出てきた代わりに、俳句歳時記を片手に詠む行為への疑問は膨らむ一方だった。

○  
新年は宗太郎と二人で、那須のペンションの一室で迎えた。ペンションは当然満室で、他は若いカップルばかりだった。三十代の母親と小学生の男の子という組み合わせは、周囲の空気からは浮いていたが、それを承知で私は何軒も電話して予約をしたのだった。

新しい年の始めに、いつもの仕事部屋から電子メールで径士郎に新年の挨拶を発信することに、少しだけ抵抗があった。

径士郎には子供がいないし、勤めているわけでもないの、別にクリスマスや正月だけではなく、いつも夫婦水入らずの生活を送っているわけだが、年末年始の一種特別な時間感覚は、私に説明不能の嫉妬を植えつける。パソコンの端末から巨大なホストコンピュータへ伸びるラインを閉ざして、私は静かな新年を見知らぬ土地で迎えたかった。

「ママ、髪が伸びたね。このまま伸ばすの？」

小さな鏡台を覗き込みながら髪をとかす私に、宗太郎が不意に声をかけてきた。

近くに遊ぶ場所があるわけでもない那須のペンションの一室。宗太郎は朝からずっとテレビの正月番組を見続けている。退屈に違いないが、文句は一言も言わない。

離婚してから、宗太郎はあまり甘えなくなつた。分別がよすぎる息子に、私はときどき戸惑いを感じながら接する。

宗太郎は父親を失ってしまった自分の悲劇をよそに、まるで自分が幼すぎて私の夫役を務められないことをすまながっているようにさえ見える。

「本当ね。随分伸びちゃったわね。みっともないかな？」

私はブラシを動かす手を休めて、鏡の中に映る宗太郎に訊いた。「ううん、全然。長いほうが僕は好きだよ。前に、ママが髪切っちゃったときもそう言ったでしょ？」

「そうだった？」  
長かった髪を思いきって切ってしまったのはいつだっただろうか？

若い頃の艶を失っているのに、未練がましく伸ばしているのが惨めになって切ったのだが、前夫は「切ったの？」と一言言っただけで、なんの感想も表明しなかった。

私の髪を気にしてくれていたのは、夫ではなく息子のほうだったわけだ。

「授業参観日の前に切っちゃったんだよね。がっかりしちやっだよ、ほんと」

「そんなこと言わなかったじゃない」

「ちよつとだけ言ったよ。でも、あんまり言うと思つて」  
なぜ小学生がそこまで気配りしなければいけないのかと、逆に叱ってやりたくなつたが、結局黙っていた。

。

渋滞以外は取り立てて印象に残ることも少ないまま、正月旅行が終わった。家に戻って最初にしたことはパソコンに灯を入れ、通信ネットワークへ接続することだった。

電子メールは二通届いていたが、径士郎からではなかった。

三が日が過ぎ、松が取れる頃になつても、なぜか径士郎からの電子メールは届かなかつた。

私からは二通のメールを送つた。

「新年ですね。奥さんをご旅行でもしているのでしょうか。私のほうは大晦日に息子と一緒に那須のペンションに一泊し、うつつ

らと雪化粧した高原で新年の朝を迎えてきました。

「周りは若いカップルばかりで……」

「こういうメールにいつまでも返事がこないというのは惨めな思いがする。」

送信簿を開き、配達のチェックをすると、私からのメールは翌日には受信されていた。

径士郎は私からの電子メールを受け取りながら、なぜか返事をよこさないでいるのだ。

なぜ？

不安が渦巻き、眠れぬ夜がさらに幾晩が続いた後、待ちわびていた返事が来た。

〔澤田径士郎 VB23415N〕

題名：ごめん

正月を前に妻が過労で寝込んでしまい、このところすっかり主夫をしています。それと、家でやっている小さな塾のほうも、受験を目前にして今がもつともいそがしいときで、夜十一時すぎまで受験生を個人指導していることもあります。そんなこんなで、返事が遅れました。ごめん。

正月に那須のペンションだなんて、ずいぶん変わったことを考えますね。

奥多摩の正月は静かなものです。野鳥のさえずりをのぞけば。霜柱などというものも、都会ではもう見られなくなっただけでしょうが、ここでは健在です……」

奥多摩の冬を紹介する文章が少し続いただけで、その電子メールは終わっていた。

なんだか急に他人行儀になったようで、奇妙な印象を受けたが、

返事が来たことで私はとりあえずはほっとした。

すぐに返信した。

「私のほうこそ、あなたが大変な状況に置かれていることを思い及ばず、お気楽な文章を書き送ってすみませんでした。私のことは気にしないでください」

このときを境に、径士郎と私の電子メールは次第に頻度も文章の量も減っていった。

会いたいと、素直に気持ちを吐露したことも何度かあったが、径士郎の返事は歯切れが悪かった。

「会わずにいることもまたテンションにつながり、それが僕を執筆へと駆り立ててくれます。勝手なことばかり言っていますが、今会ってしまおうと、このまま君の肉体の魅力にだけ溺れていってしまう気がして怖いのです」

彼が求めているのは私という存在ではなく、私が発する言葉だけだというのか？

失意と苛立ちのまま、少しも気が晴れない春が訪れ、通り過ぎていった。

## レイン

雨が三日間降り続いていた。

夜中にはやんでいられるらしいのだが、朝起きる度に雨音を聞くので、ずっと降り続いているという印象になる。

朝、階下のゴミ置き場に生ゴミのペールを出しに行く途中、隣室の奥さんとすれ違った。新婚らしい若い奥さんで、大きなとんぼ型の眼鏡をかけている。

「よく降りますね。まるで世紀末の大洪水が来たみたい。このま

まずつと降り続けて、日本列島が海に沈んでしまふんじゃないかなんて思いたくなるほどよく降りますね」

普段ほとんど会話を交わしたことの無い相手から、いきなりそんな言葉をかけられた。

「え、ええ……」

私はどう答えていいものか咄嗟には判断できずに、曖昧に笑みを浮かべた。

そうか、こんなとき「ノアの方舟のことですね」などとは言えないものなのだ。すんなりと返事ができないような、凝った挨拶をするほうがいけないのだということに、初めて気がついた。

「今年の梅雨は長いのかしら？」

私は気を取り直してそう言った。

「さあ、気象庁の長期予報は、大体反対のことを言っていることが多いですからね。空梅雨だって言っていた気がするから、長雨になるのかもしれないね」

とんぼ眼鏡の奥の細い目をさらに細めて笑いながら、彼女は部屋に戻っていった。

私はドアの郵便受けに挟まった朝刊を引き抜いて、中に入った。パソコンのスイッチを入れ、起動画面のメッセージが流れるディスプレイの前で、雨でしけってしまった朝刊を開く。ページを繰るうちに、小さな見出しが目に留まった。

〔文学潮流新人賞に澤田けい氏〕

流れていた目がそこで急ブレーキをかけて止まる。

径士郎のことだろうか、いや、まったくの他人かもしれない……私ははやる心を抑えながら短い記事を読んだ。

〔第三十二回文学潮流新人賞は、澤田けい（本名・澤田三知子）氏（三七）の『目の不自由なへび』に決まった。賞金五十万円。〕

贈賞式は七月三日、ホテル新東京別館、葬の間にて。なお、けい氏の夫・径士郎氏も、第二十六回の同賞で佳作受賞をしている」

二度、三度と、私は意味が分からずにその記事を読み返した。『目の不自由なへび』を文学潮流新人賞に応募したいという話は径士郎から聞いたことがある。これが径士郎の作品であることは間違いない。しかし、受賞者・澤田けいの本名は「澤田三知子」となっている。

そこでようやく、私は以前彼から、名前と住所を貸してほしいという申し出を受けたことを思い出した。一度佳作受賞している自分には「新人に限る」という同賞への応募資格がないからだと言っていた。私はその申し出を断ったので、彼はその後、奥さんの名前を使って応募したのだ。そうに違いない。

しかし、新聞への正式発表にまで奥さんの名前が出ているということは、出版社側にまだ真相を告げていないということだ。このままでは授賞式にも奥さんが出席し、これからも「澤田けい」の作品は径士郎ではなく、奥さんが書いているということになってしまう。

一体どうするつもりなのだろう。

私は久しぶりに、径士郎へ電子メールを書き送った。

〔題名：おめでとう!!! でも……〕

文学潮流新人賞受賞、おめでとうございます！ ついにやりましたね。佳作止まりだった悔しさを見事に晴らしたあなたの意志の強さと努力に敬服します。

でも、応募者の本名に奥さんの名前を使ったことを、どこでどう修正するのでしょうか？ 新聞発表までされてしまって、今から修正するのはかなり大変なことになるのだろうと心配しています。まさか、授賞式当日までには編集部へ真相を伝えるのでしょうか？

混乱が起きるでしょうが、まさかそれで受賞取り消しという事態にはならないですよ？ 逆に、うまくもっていけばマスコミが取り上げてニュースになり、宣伝につながるかもしれません。そうなることを祈っています。

いちばん心配なのは、あなたが、今後ゴーストライターに徹する気ではないのではないか……ということです。このまま奥さんを作家に仕立て上げ、実際にはあなたが執筆をする。そんなことはしないでくださいね。世間を騙すとか、そういうことよりなにより、あなたには自分の実力を正々堂々と世に問う権利があるはずです。くれぐれもスタートを間違えないよう、老婆心ながら申し上げておきます。もちろん、そんなことは露ほども考えていないとは思いますが。

とにかくおめでとうございます。『目の不自由なヘビ』は、現代文芸フォーラムに発表されたまったく別の短編のほうしか知りませんが、早く本物（というのもおかしいですね。同名の別長編ですね）を読んでみたいと、来月号の「文学潮流」を待ち遠しく思っています。

これを機に、今度こそ大きく羽ばたいていけるよう、祈っています」

返事は返ってこなかった。

送信簿を見ると、翌日にちゃんと受信している。

念願の受賞が決まった今、もう私という覚醒剤には頼らないということなのだろうか。それとも、私の覚醒剤効果が切れてしまったということだろうか。

返事がないことは寂しかったが、それでも私は素直に径士郎がチャンスを掴んだことを喜びたかった。

たとえこのまま死ぬまで、径士郎とは二度と会えなかったとし



ても、いや、私からの呼びかけに径士郎が答えてくれなかったとしても、恨むことはしたくない。一方的に利用されただけなのだからとも思いたくない。

彼の人生の大切な局面のひとつに立ち会えた。あのまま彼と再会することなく一生を終えていたであろう私の人生に、手応えのある印が刻まれた。傷ついた樹皮がやがて盛り上がってこぶを作るように、触れれば確実に感触が蘇る愛しい印が。それだけでもいいのではないか……。

私は自分に嘘をついているのだろうか？ 思いがけず、涙がこぼれた。説明のつかない涙だった。

○  
新人賞発表号の発売日、私は書店が開くのと同時に「文芸潮流」を買いに走った。

家からいちばん近い書店にはなかった。新人賞発表号とはいえ、やはり純文学系の雑誌を入れている書店はそう多くはない。駅前的大型書店でようやく手に入れた。

受賞作の中身もさることながら、私はあのまま彼が奥さんの陰に隠れたまま名乗りを上げなかったのかどうかを確かめたかった。受賞作発表のページには、はにかんだような中年女性の顔が大きく載っていた。

それを見るなり、私は大きくため息をついた。  
径士郎はこのまま嘘を突き通す気なのだろうか。一生、彼女の黒子でいるつもりなのだろうか。それとも、暫く彼女のゴーストライターを務めた後、時期を見計らって「澤田けいの夫・澤田径士郎」として、再々デビューをするつもりなのだろうか。

立ち読みのまま、受賞の言葉を読んだ。

「ありがとうございます。作家である主人の影響を受け、趣味のつもりで書き始めた小説がこのような立派な賞をいただくことになり、嬉しさよりも先に戸惑いを隠しきれません。

本来なら、力強い執筆宣言や軽妙な自己PRを書くべきなのでしょうが、今はまだとてもそうした心の余裕がありません。

この作品は、主人の細かなアドバイスや励ましがなければ絶対に完成することはなかったものです。その意味で、この受賞は、主人と二人でいただいたものと考えております。

幸い、私の隣にはいつも先輩作家である主人がおりますので、今後も二人三脚で、少しでもいい作品を書き続けていこうと思います。

「ありがとうございます」

平凡な言葉の羅列は、径士郎のものとはとても思えなかった。それとも、この凡庸さもまた、径士郎の計算によるものなのだろうか。

初めて見る彼の奥さんの顔は、想像していた以上に実直そうで、まるで新興宗教の勧誘員か救世軍の仕出し係のようだった。彼女に、こんな世間を相手に回したお芝居が続けられるものだろうか。私は困惑したまま雑誌をレジへ持っていく、代金を支払った。家に戻り、パソコンのキーボードを向こう側に押しやって受賞作を読み始めたが、なかなか頭に入ってこなかった。

受賞の言葉や奥さんの顔写真とはまったく相容れないような、攻撃的でトリッキーな文章が続く。何度も途中でページから目を離し、何も映っていない目の前のCRTの中に彼の奥さん……澤田三知子の、化粧つけない顔を思い浮かべた。

「我々はみな、目の不自由なへびだ。自分が置かれている世界を

知覚しているようでいて、実は世界の実体が見えていない。身体を触れ合わせて生殖し、土の中を這い回って食い物を捜し、それだけでは何か足りないのではないかと思いつつも、死ぬまで自分の正確な姿さえ知ることがない。

宇宙というものがあることは知っていても、その外側のことにまではとても想像が及ばない。時間と空間の概念を持っているようにうでいて、その始まりや果てを実感できない。

しかし、目の不自由なへビは、己が形ばかりに備えている目のことを疑問に思わない限りは自己完結した存在なのだ。外の世界の何者かから、そんな勝手な名づけられ方をしていることに対しても、立腹しないですむのだ……」

明らかに径士郎が書いた文章を、彼の奥さんの顔と重ね合わせながら読んでいる人たちがいる。

こんなことがあつていいのだろうか？

私は最後まで読み終える前に、雑誌を机の上に伏せた。パソコンの電源を入れ、電子メールを書いた。

「本当にこのままでもいいのですか？　いつまでお芝居を続けるつもりですか？」

何度も言葉を選び、言い替えを重ねながら書いたが、結局送信することはしなかった。

これは、彼と彼の奥さんの問題、つまりよその家の家庭問題なのだ。

「ただいま！」

宗太郎が学校から帰ってきた。

「おかえり」と、反射的に返事をしている自分。

私の家庭はここにある。

私は通信ソフトを閉じて、パソコンの電源を切った。

径士郎の住む家庭へと伸びかけた見えないラインが、パソコンのクーリングファンの音と一緒に消滅していった。

## くま

新人賞を受賞後、「澤田けい」は順調に活躍し始めた。

「文学潮流」の次の号に早くも受賞第一作が掲載され、他誌にも次々と作品が発表された。その中には、私がフロッピーで読んだ作品や、アイデアメモを見せてもらった作品も含まれていた。

受賞第一作は、私が読んだことのない作品だった。なんとパソコン通信を通して「精神的不倫」をする、中年の元恋人同士の話だ。しかも、主人公の名前が笙子。

最後まで読んだものの、純粋な読者としての感想は当然持てなかった。

評論家の批評もあちこちで見受けられるようになったが、概ね好意的なものばかりだった。中には「久々の大器」「低迷する文学界を斬り開く新しい才能」などと絶賛する批評もあった。

澤田けいの作家としての土台は、着実に固まっているように見えた。

担当編集者たちは知らないのだろうか。それとも本物の澤田けいが夫の径士郎だということは、出版界の公然の秘密になっている。一般読者に伝わっていないだけなのだろうか。

救いは、澤田けいが、小説執筆以外にもまったく手を染めないという姿勢を貫き通していたことだ。テレビ番組や座談会、講演会への出演はおろか、「書斎拝見」や、インタビュー記事の類もいっさい目にする事はなかった。

そのうち、私は径士郎が名乗りを上げるかどうかということに

対して、興味を失っていった。作家・澤田けいは、その作品と共に存在している。それでいいのではないかと気づいたのだ。

小説の広告などには、十年も二十年も前の作家の顔写真が平気で使われていることがある。一般の読者はその一枚の写真を頼りに、作家のイメージを勝手に築き上げる。

作家・澤田けいには、たまたま化粧つけない中年女性の顔写真が「記号」として与えられた。それだけのことではないのか。そして、径士郎がそのことを肯定しているならば、なんの問題もないのではないか。

さらに新しい年が明け、私の生活から径士郎の記憶が消えかけていたある春の日、いつものように開いたパソコン通信の受信データの中に、突然径士郎の名前が現れた。

〔澤田径士郎 VB23415N

題名：懺悔・感謝・願い〕

径士郎からの電子メールを受け取るのは、一年ぶりだった。

懺悔・感謝・願い……奇妙な題名を頭の中で口ずさんでから、私は椅子に座りなおして本文を読み始めた。

「おかげさまで、澤田けいという作家が誕生しました。あなたには本当に感謝しています。

澤田径士郎は、才能を持ちながらも努力することが苦手な人でした。努力して大成するタイプでも、存在そのものが光っている天才型でもなく、中途半端な創作者でした。その中途半端さが、読者の心をいまひとつ揺さぶらなかつたのです。

彼は、絶えずだれかの心のエネルギーを、点滴の栄養液のように必要としている人でした。そして自分でもそのことを知っていて、本能的に絶えず他者からの刺激を求め続けていました。そし

て、残念なことに、私にはその面においては、彼の満足のゆく刺  
激を与えることができなかつたのです」

彼？ 私？

そこまで読んで、私は背中に冷たいものが走るのを感じた。  
これを書いているのは径士郎ではない。彼の奥さんなのだ。

「世間のかたがたは今、新人作家澤田けいは、三八歳の地味な中  
年女性だと思っています。この私の姿を作品に重ねながら読んで  
います。もちろんそれは虚構です。こんなつたない文章しか書け  
ない私が、作家になどなれるはずはありません。私はがんらい筆  
ぶしようで、かんたんなお礼状ひとつ書くのに三日も四日もかか  
るような人です。でも、文学は好きで、おそらく読書の量では彼  
にも負けません。」

私たちは結婚してからずっと、チームを組んでいました。執筆  
そのものは彼の仕事でしたが、テーマや人物設定などは、私が口  
頭でアイデアを出すことが多かつたのです。たとえば現代文芸フ  
ォーラムに発表した『目の不自由なヘビ』は、そんなタイトルの  
小説を書いてみたらと私が言ったことがきっかけでした。アイデ  
アもほとんど私が出しました。

受賞作となった長編の『目の不自由なヘビ』のほうは、彼が独  
力で書こうとしていて、さいごまでまとまらずにほうりだしてい  
たものです。そこにあなたが現れました。

彼ははじめて私からはなれ、あなたという新しい栄養剤を使っ  
て、書きあげられないでいた長編の『目の不自由なヘビ』を完成  
させようとしたようです。

でも、やはりうまくいかなかつたようです。

最初は私に隠れて電子メールでのやりとりをしていたようです

が、私は当初からそれには気づいていました。その新しい刺激によって彼がひとりで書いてくれるなら、それはそれで望ましいことではないかと思いました。見て見ぬふりをしました。あなたと直接会っている日は、本当に苦しい思いもしました。

それでもやはり彼は書き上げられなかったのです。

あの作品は、私の傷ついた心の告白があつてようやく完成したのです。

それからは、彼とあなたの電子メールでのやりとりを、私もいつしよに見守っていました。一度などは、私が代筆したこともあります。

あなたをこのような形でだましてしまったことに対しては、どんなにおわびしていいかわかりません。また、受賞作の『目の不自由なヘビ』の後半部分では、あなたの存在なしには書けなかった要素もたくさんあり、その意味で、あの作品はあなたも含んでの共同制作作品だったと思っています。

受賞が決まってから、私はほんとうにいろいろなやみました。もともとがひどきらいで、知らない人に会うことががてな性格なので、作家「澤田けい」の窓口として表に立つのは今でも苦痛です。ぎやくに彼の背後にかくれて、くろこにてっしていたいのですが、運命は皮肉です。

あなたのこともとてもなやみました。すべてをしようじきに告白したうえで、ふたりで懺悔しましょうと彼に言いましたが、彼はこのまま沈黙しようと言ってききませんでした。

私はけつきよくしたがいりましたが、やはりあなたにだけは一度すべてをお話ししたうえで、ゆるしを乞うべきだと思いました。

この電子メールは彼にはないしよで書いています。彼が書けばもつとじょうずな文章になるのですが、へたな文章ですみません。

気持ちが悪くだけ伝えられるか、ぜんぜん自信がありません。私

は文章の技術はまるでだめなのです。

ひたすらおわびするしかありません。ごめんなさい。許していただけるとは思っていませんが、ほんとうに、どうしていいかわかりません。

おわびしてもきれない身でありながら、最後におねがいがあります。

編集者のなかには、私が実際には執筆していないのではないかとうすうす感づいている人もいます。でも、原稿はすべてフロッピーや電子メールで入稿していますし、執筆する姿をだれに見られるわけでもないので、証拠はなにもありません。それに、出版社にとっても、澤田けいが私なのか彼なのかということなど、どうでもいいのです。

最初のうちはずいぶん意見の対立もありましたが、今ではこのスタイルにふたりとも慣れてしまいました。彼はやはりひとりだけでは書けない人なのです。私が絶えず何かヒントを出し、テーマを与え続けないとだめなのです。文学潮流新人賞へのこだわりから、再出発のしかたがこんな形になってしまいました。今、私たちはそれなりに幸せです。作品が活字になる喜びを、彼も私も満喫しています。澤田けいがだれなのかではなく、私たちが澤田けいを生み出したのだと思っています。

懺悔の気持ちを込めて、すべてをお話ししましたが、どうかこのことは胸の中にしまっておいていただけないでしょうか。いつか、真相を世に告げる日が来るかもしれません。そうぞ、その日が自然に訪れるまでは、このままそっと見守っていてほしいのです。これが私からのおねがいです。

勝手なことばかり書きました。おゆるしくください。

そして、かさねがさね、なにとぞよろしくおねがいたします。

澤田三知子



「俺たちはおまえたちの一万倍長い歴史を築いた」

そう大書されたアーケードを潜ると、いささか冷房の効きすぎた薄暗い空間が私たちを出迎えた。

昨日、髪をばつさり切ったので、うなじのあたりがひんやりし、少し心許ない。

美容室からの帰り道、偶然学校帰りの宗太郎と一緒にになった。長い髪のほうが似合うと言っていた息子の感想がちよつと心配だったが、宗太郎は数秒間神妙な面もちで私を見つめた後、「短いのも結構いいよ」と言った。

どこまで気配り上手な子供なのだろう。本当に困ったものだ。

海の向こうから、多数の恐竜骨格標本を運んできての博覧会。入り口ではオレンジ色のコスチュームに身を包んだ若い女性が、にこやかにパンフレットを配っている。

正面にはステゴザウルスの骨格標本が飾られていた。

「これ、本物かなあ？」

宗太郎が珍しく子供らしい声をあげた。

宗太郎は中学生になった。

このままどんどん大人の心中を読みとるような少年にはなつてほしくないのです、こうした子供っぽさに触れるとほつとする。

子供嫌いの径士郎には、生涯こんな気持ちには分らないのだから、うな、などとふつと思う。

澤田けいは、相変わらず着実に作品を発表し続けていた。

私は今でも彼、いや、「澤田けい」の愛読者続けている。

平仮名の多いあの「懺悔・感謝・願い」という題名の文章以来、「澤田径士郎」からの電子メールは途絶えていた。

もちろん、あれを書いたのは奥さんのほうだから、径士郎本人からの最後のメールはもつと前のものだったことになる。

改めてそれまでの電子メールを読んでみると、年が明けてから最初に来たメールが、やはり同じような仮名の多い文字遣いになっていることに気づいた。彼女が「一度だけ代筆した」というのがきつとそれなのだろう。

あるいは、小説ばかりではなく、私が受け取った電子メールの中にも「夫婦の合作作品」がいくつかあったのかもしれない。返事は出さなかった。

彼ら夫婦の合作に、これ以上参加するつもりはなかったから。

「あ、あれ！ トリセラトップスだ」

宗太郎が進路の先に次の骨格標本を見つけて、小走りに走り出した。

「走るのはやめなさい」

私は宗太郎の背中に強い語気で声をかける。

中学生の息子と四十を目前にした私とでは、同じ時間を共有していても過ぎていくスピードが違う。宗太郎はなかなか大人にならない自分に苛立ち、私はあつと言う間に成長していく息子についていけずに戸惑う。

同じ时空の、こんなにそばにいなながらも、私たち親子はまったく別の速度を持つ独立した流れなのだ。

言葉は、おのおの流れが時折あげる水しぶきにすぎない。

「仰向けにもう泣かぬ髪を切る」

私は、宗太郎が「結構いいよ」と言ってくれた短い髪にそっと手を触れ、新しい自分自身の感触を確かめてから、奥へ続く暗い通路へと踏み出した。

(了)

PDF版作成にあたってのあとがき

この小説は、「小説すばる新人賞」受賞後まもなく書いたものですから、一九九〇年前後のものです。

その頃はまだインターネットも一般的ではなく、僕はもっぱらニフティを愛用していました。小説の中に出てくる電子メールの書式も、インターネットメールではなく、パソコン通信のものになっているのが、今読むと、懐かしいですね。

一時はニフティのフォーラムにもよく顔を出していましたが、もう、だいぶ前からパソコン通信からはすっかり離れています。

この作品は、当初、文芸誌「すばる」（「小説すばる」ではなく）に掲載される予定で、初校ゲラの赤入れを急がされ、一日で戻したりしたのですが、結局掲載されませんでした。

理由は、隣り合った「小説すばる」と「すばる」の編集部が確執だったようです。

「すばる文学賞佳作のNは、最近小説すばるにばかり書いているようじゃないか」

「そういうそちらも、小説すばる新人賞のたくきの作品を、次のすばるに掲載するそうじゃないか」

「じゃあ、やめる」

……と、こんなやりとりがあつたのだと、後になって編集者から聞きました。

信じられないような話ですが、実際、受賞後しばらくは、こんなレベルのもめごとに否応なく巻き込まれ、当惑し続けたものです。

この作品のことは、ずっと忘れていました。今後も本になる可能性はゼロに等しいでしょうし、文藝ネットに置くことにします。Q T V i e w バージョンは載せていたのですが、知り合いの俳人がマックユーザーであることを思い出し、PDFバージョンを用意しました。

作中の俳句は、僕自身の作品がほとんどですが、一部、師匠の作品もあります。僕の作品も、師匠の添削・指導を受けています。その師匠は、やはり常人にはなかなか理解できない俳句結社のしきたりだの人間関係だのがあるとかで、匿名を希望しています。この小説の中に一部使わせてもらうことについては、もちろん了解を得ています。

つまらないメンツや体面でもめているうちに、文学の世界そのものがどんどん貧弱になり、今はもう、娯楽小説でさえ簡単には出版できなくなっていました。

まだ、言葉を使うことに対して志を高く掲げていた時代を懐かしみつつ、アクロバットにこのファイルを処理させます。

二〇〇二年一月 鐸木能光